

日 仏 演 劇 協 会 会 報

Bulletin de la Société franco-japonaise de Théâtre

復刊 2 号

2010 年

nouvelle série

Numéro 02

2010

日 仏 演 劇 協 会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内 tel: 03-5424-1141

目 次

わたしのこの一冊：

「人間と芝居の危険な関係」	佐藤実枝 ……………	3
Alain Coupric, <i>Marquise ou la « Déhanchée » de Racine</i>	秋山伸子 ……………	4

アンヌ・ユベルスフェルト講演会：「コルテス —— その才能の諸地平」(後)

アンヌ・ユベルスフェルト 佐藤康 訳 ……………	5
--------------------------	---

静岡のオリヴィエ・ピイ	横山義志 ……………	8
-------------	------------	---

コレクション現代フランス語圏演劇刊行に寄せて	佐伯隆幸 ……………	10
------------------------	------------	----

書評：渡邊守章『越境する伝統』、『快樂と欲望』	佐伯隆幸 ……………	12
千川哲生『論争家コルネイユ』	友谷知己 ……………	12
小田中章浩『現代演劇の地層』	根岸徹郎 ……………	13

紹介：バレエ・リュス 100 年	北原まり子 ……………	13
バレエ・リュス展	八木雅子 ……………	14

フランス語圏舞台芸術・文献目録 (2007 - 2009)	堀切克洋 ……………	15
	北原まり子	

活動報告 ……………		28
------------	--	----

編集後記 ……………		28
------------	--	----

[わたしのこの一冊]

「人間と芝居の危険な関係」

佐藤 実枝

筆者はここ数十年マリヴォー劇に専念したが、かつてはミユッセの『喜劇と格言劇』から遡って、彼に影響を与えた Carmontelle や十八世紀後半の^{テアトロ・マニ}芝居熱に熱中した時期もある。最近、この頃の筆者の記憶を一新させる事件があった。六月末に日本で連続講演をされたパリ第四大学の Pierre Franz 氏との、思いがけない再会である。筆者が Chantilly 城 (Musée Condé) まで足を伸ばしてカルモンテルの資料収集に奔走していた頃、第四大学の M^{lle} Rougement のご紹介で専門家のフランツ氏を訪ねたのだった。今回二十六年ぶりの再会だったが、「芝居熱の研究はその後フランスでも見るべき進展がないので、マリヴォーのあとはぜひこちらも続けて欲しい」とのこと。同意はしたものの筆者の現状では心許ない約束ではある。せめてこの機会に、当時よく利用した文献の一冊を想起しながら、貴族社会の^{テアトロ・マニ}芝居熱現象についていささか私見も述べたいと思う。問題の本は二十世紀後半に出版されたおそらく唯一の関連文献で、Jean-Hervé Donnard の Le théâtre de Carmontelle (Armand Colin) 1967、特に名著でも大著でもないが文献目録は一応完備している。「王侯貴族の娯楽」と軽視されてきたジャンルが、C.N.R.S の協力で研究対象になったのはフランスでもこれが最初だった。

カルモンテルはオルレアン家に仕えて、公の催す私的公演を企画・催行した作家兼プロデューサー。(現代から見れば)市中劇場では不可能な既成概念の拡大、観客参加をそそる構造、ひいては演劇自体への問いも引き出しかねない形式で、百作ほどの^{プロヴェルブ}格言劇を上演した。彼をいちばん悩ましたのは、台詞を覚える忍耐力のない貴族たちが多くことで、いかに滑稽に陥らせずに台詞を言わせるかが問題だった。かつてマリヴォーがサロンとイタリア人劇団から学んだように、カルモンテルもサロンの日常的会話を土台とした即興を薦める。^{プロヴェルブ}「格言」は即興の脱線を防ぐ重要な枠組みでもあったとドナールは言う。作品の題材は当時のフランス人の生活に広く取材し、リアルで簡素なタッチがたちまち人気を集めた。彼は画才豊かで、格言劇に挿絵をつけたり、ピアノを弾く *Enfant Mozart* や文人 Grimm など同時代人の夥しい肖像画を残したが、ここにも読み取れる現実への幅広い好奇心と細心な観察が彼の創作の基本だった。しかしあくまでお抱え作家の分は守り、芸術的完成よりは奉仕精神に徹し、生前出版した百三

作の格言劇も「即興のセリフのほんの一例」とつつましい。即興が難しい場合に備えた台詞で、簡潔で覚え易くアドリブを予想しているのが、貴族たちは気楽にエスプリを発揮、これが一層参加への意欲を掻き立てた。

ドナールは「サロン劇を成立させる具体的空間」を示す章を設けているが、ここにも参加をそそる構造がある。庭園・森などの戸外や、大貴族の私立劇場を思わせる舞台(大階段やロージュなど)はむしろ少数で、約半数は日々客が出入りするサロンや広間が舞台となった。登場・退場のためのドアが1つか2つあればその一角が舞台となるので、利便性、経済性から愛好されたが、客席と舞台を区別する明確な線引きはない。演技者と客席には現代人が求める以上の一体感や交歓があった。例えば意中の人が恋人役になれば告白の絶好のチャンスとなり、恥をかきそうなら虚構に逃げ込むというように、芝居は彼らにとって生活の様式だったから、台詞はときに肉声となり、ときにエスプリの^{あかし}証となった。しかし、自己を晒しがちないわゆる「口立て芝居」は当然危険も伴う。芝居が麻薬となって、酔えば酔うほど彼らの現実認識を麻痺させた面もあろう。当時流行の「カフェ遊び」の〈劇化〉はさらに特異な形態で、観客と役者が混在し、たわいない筋立てでもしばしば観客を劇中に巻き込むようにたくらまれていた。邸の従僕たちはボーイ姿で給仕し、観客も筋書きに合う衣装で夜食を取りながら観劇する。虚構のなかに敢えて生活行為(飲食)を取り込むほど、両者を突き混ぜようとする偏執は強い。虚構にはイリュージョンを求めず、逆に不安な現実をイリュージョン化したいのではと思えてくる。(大革命前夜の貴族たちは、高まる敵意の中でも特権に執着した。しかし当然不安はある。王妃でさえ公式の場を避け、プチ・トリアノンの小劇場で芝居に埋没した)。カルモンテルは第3階級の役を数多く描いたが、オルレアン公も特に農民役を好んだという。百一番目の格言劇『2人の田舎役者』を例に取るなら「貴族に化けて棒叩きにあう役者を、本物の貴族が演ずる」という倒錯的構造がある。特権階級の悪や滑稽をみずから演じて楽しむ自虐的遊戯——カイヨワは『遊びと人間』の中で、遊びの本質には社会的役割からの、仮面による脱出・解放があるというが、彼らの変身願望にはより深い闇があったに違いない。

[わたしのこの一冊]

Alain Couprie, *Marquise ou la « Déhanchée » de Racine, Paris, L'Harmattan, 2006.*

秋山伸子

ヴェラ・ベルモン監督の映画『女優マルキーズ』(1997年)では、ソフィー・マルソー演じるマルキーズが、まるで売春婦のように描かれている。事実、17世紀前半には、女優を劇団の共有財産とみなす偏見がはびこっていたことは、スキュデリーの戯曲『役者たちの芝居』(1632年)からもうかがえる。プロの女優に対してさえ、このような偏見があったのだ。ましてや、大道芸人に対する偏見はいかなるものであったろうか？ リヨンの町では、大道薬売りジャコモを父に持つマルキーズが、ダンスによって市の客を引き付け父親の商売を助けている。街角で踊るダンサーから出発して、『アンドロマック』によって不朽の名声を得るまでの女優マルキーズの成長物語の背後に、当時の演劇界、社会、街並みが登場人物の複眼的視点から鮮やかに描き出され、数々の「神話」が解体されていく。

肖像画1つ残されていない伝説の女優、謎だらけの女優マルキーズ。いつ、どこで生まれたのか？ フランスか、イタリアか、スイスか？ 洗礼の記録、公正証書、人口統計学者の調査結果、文学的な手記、著者はあらゆる資料を駆使して謎を解明しようとする。リヨン生まれの女優という説もあるが、リヨンの教区に完全な状態で保存されている洗礼の記録には、マルキーズの名前は見当たらない。

マルキーズは、モリエール劇団の俳優デュ・パルク（通称グロールネ）との結婚（1653年）によって女優への道を一步踏み出す。アリアヌ・ムヌーシュキンの映画『モリエール』(1978年)で描かれる貧乏な旅回りの役者モリエール、その才能が地方の観客によって開花したモリエールという「神話」を著者は鮮やかな手つきで解体してみせる。モリエール劇団は、確固たる庇護者の経済的支援を受けて、南フランスの三部会などで公演したのであり、1658年にパリに戻って来た時に劇団がセヌ川を介して運び入れた荷物（17人の劇団員の私物以外にも、衣裳、舞台装置など）は8トンにもものほり、何台もの荷馬車が必要なほどの財を築いていたのだ。

モリエールの喜劇『粗忽な男』(1655年)のイポリット役、『恋人の喧嘩』(1656年)のマリネット役などで女優としての経験を積んだマルキーズは、ルーアンにおいてジルベールの仕掛け芝居『ディアナとエンディミオンの恋』の夜の女神を演じ、コルネイユの心を虜にする(1658年)。パリの町と宮廷についてのニュースを伝える週刊紙で詩人ロレは、1661

年ヴォー＝ル＝ヴィコントにおける祝祭でのモリエール劇団の公演を評して、マルキーズを「美しい女優」と称え、その「ダンス、朗唱」が人の心を奪うものであると述べている。『「お嫁さんの学校」批判』(*La Critique de L'École des femmes*, 1663年)におけるクリメヌ役の「まるで身体の関節すべてが外れたかのような」「機械仕掛けの人形」を思わせる演技、「腰をくねくねさせた」演技は観客に強い印象を残した。ラシーヌが友人に宛てた書簡で『ラ・テバイッド』(1664年)のヒロイン、アンティゴヌ役をマルキーズに演じてもらいたいと書いた時も、この演技に言及しているほどだ。マルキーズの夫グロールネが病に倒れたため、結局この配役は実現しなかったが、悲劇俳優としてのマルキーズの才能にラシーヌが注目していたことを物語るエピソードである。マルキーズは、『アレクサンドル大王』(1665年)のヒロイン、アクシアヌを演じて、当時の悲劇の殿堂ブルゴーニュ座の看板女優と並び称されるほど高い評価を得る。

モリエール劇団による初演からおおよそ2週間後、『アレクサンドル大王』は、ライバル劇団ブルゴーニュ座でも公演が開始される。これは、自分の戯曲を初めて舞台にかけてくれた恩人モリエールに対するラシーヌの重大な背信行為であった。夫グロールネの死後、ラシーヌの恋人となっていたマルキーズは劇団で微妙な立場に置かれる。『人間嫌い』(1666年)でマルキーズが演じた役はエリアントというのが通説だが、アルシノエ役というのも考えられるのではないかと著者は言う。自分の誘いになびこうともせず、ラシーヌを「ひっかけた」女に対する皮肉や苛立ちがこの配役に込められていたとしたら？ まるで推理小説さながらに、謎解きが展開されていく。『人間嫌い』の後、マルキーズは舞台から遠ざかっているが、その理由は？ 妊娠していたのだ、しかもそれはラシーヌの子ではないか。

1667年マルキーズはブルゴーニュ座に移籍する。1647年に改修されてから最大2000人の観客を収容できるようになったブルゴーニュ座の舞台で、マルキーズはアンドロマックと一体化して、観客の涙を誘う。この時マルキーズもまた、伝説のアンドロマック同様、身ごもっていた。だが今度の父親はラシーヌではなかった。墮胎に失敗して病床にあるマルキーズの枕元に、ラシーヌは、お腹の子が自分の子でないと知りながら、付き添い、最期を看取ったのである。

[講演会]

「コルテス——その才能の諸地平」(後)

アンヌ・ユベルスフェルト

佐藤 康 訳

主要な地平：アフリカ

コルテスはアフリカを夢見ていた。コルテスがアフリカに発見したもの、それは言葉にできない荒々しい衝撃であった。「空港の出口から出たとたん、私が鞆のなかにつめてきたアフリカに対する考えは凍りついた。私が見たのは、黒人の警察官が、警棒を振り上げ、同胞を力いっぱい殴っている光景だった。」コルテスは「分断」の感覚に捉えられる。悲劇的な感覚だ。「目には見えないが、あまねく存在する障壁が、一方に白人たちを、そして他方には黒人たちを切り離していた。」そこに耐え難い「憎悪」の感覚も加わる。自らの肉体的な欲望の対象が黒人であることを、自身、知っていたがゆえに、それはますます耐えがたいものとなった。この「境界」における啓示から、コルテスのもっとも美しい作品のひとつ、『黒人と犬の闘い』が生まれた。コルテスはこの作品を直ちに書いたわけではない。コルテスがこれを書いたのは、遙か隔たるもうひとつの「地平」、もうひとつの文化を持ったマヤ文明の国、グアテマラの、アティティアンという湖のほとりであった。

しかし、この発見以来アフリカは、コルテスにとって個人的な「地平」であり続けた。アフリカはコルテスの虚無の思想を育んだ。『黒人と犬の闘い』の登場人物、レオーヌもその思想を語る。レオーヌに対するコルテスの註釈を見よう。「川面に浮かぶ、すでに腐敗が進んで膨れ上がった死体が黒い鷹の群れにつつかれて、ゆっくり流れているのを見たレオーヌは、片手を口に当てて思わず叫びそうになってのどをつまらせた。人間は何と、砂つぶてのようにちっぽけなものがあるか、と。」

アフリカはひとつの「地平」となった。コルテスは後にこう言っている。「私にとって、アフリカはすべてのために決定的なものだ。すべて。すべてである。アフリカなしに私はおそらく書くことはできないだろう。信じがたい特権を受けている人がある、関心をもたれていない人々がある、無価値の人々がある、そういった思い出が脳裏になれば、書けなかっただろう。」コルテスはこうも言っている。自分のどの作品のなかにも「小さい存在であっても、隠れた存在であっ

ても黒人がいる。」と。

アフリカに注いだ眼差しがコルテスに明らかにした、この暴力、この美しさ、この彼の血肉となった他所から、コルテスは作品を書かねばならなかった。そして明らかとなったのは、コルテスが主題としたのは、また主張しようとしたのはアフリカそのものではなく、血肉となったその経験だということだった。「私はかつて今も思っている。アフリカの奥地から聞こえてくる、あの見張りたちの叫び声、不安と孤独のあの囲われた土地、それが重要なテーマなのだ。」(Europe 1, 1983)

間違えてはいけない。コルテスが語っているのは、演劇の本質なのだ。演劇は、世界の目的と、その世界を受け入れる自己、厳密に言えば世界を再創造する自己とを同時に語る「経験」の成果でしかありえない。

コルテスの経験、それはアフリカの肉体への欲望、そして花々の美しさである。「夜になると、ひとりで散歩に出かける。プーゲンビリアの紫色の、ばら色の枝を手にとって、そっと唇に押し当ててみる。どれほど美しい花であることか。この花には香りはない。」(ジニューへの手紙)。美しい景色を前にしても、この他所でコルテスが見出したのは人間なのだ。人間自身にかかわることではなければ、これほど演劇に近い経験とは言えないであろう。「私が関心を持っているのはアフリカ人だ。ラテン・アメリカでもそうだった。私が関心を持ったのはただひとつ、それは人々だ。」

コルテスが自分のものとしたこのアフリカを彼はまたもうひとつの世界との接触の中でしか書くことができなかった。それはグアテマラのマヤ文明の世界であった。1年後、そこで『黒人と犬の闘い』が書かれる。それはスペイン語を話す人もいない、小さな村であった。

コルテスが憧れていた大演出家、パトリス・シェローがこの作品を読んで高く評価し、ナンテール劇場で上演したのも驚くべきことではない。それは素晴らしい演出、またピコリ、ミリヤム・ボワイエが出演する素晴らしい舞台であった。作品はアフリカのとある建設現場。白人の現場主任のひとりが

誤って黒人の労働者を殺してしまう。その黒人の兄弟が、遺体をお返し願いたい、と要求しにやってくる。主任は遺体の引き取りに伝えられない。彼は遺体を下水に流してしまったのだから。そして主任は、前の日にここへやってきてアフリカに魅了されたひとりのフランス人女性の目の前で、殺される。彼女はヨーロッパへ帰っていく。ある一体験という以上の豊かな経験をして帰っていくのだ。ほとんど物語らしい物語はない。しかし観客は疑いもなく、この作品に美しさを認めた。

またひとつの他所、またひとつの「地平」はニューヨークだ。そこはコルテスの眼差しが集中する特別な場所なのだ。具体的には、それは埠頭である。「廃屋となったドック、そのなかで私は身を隠して幾日か、夜をすごした。はなはだしく、尋常でない場所だった。そこは浮浪者の、ホモの、麻薬密売人の隠れ家、闇取引の行われる場所だった。そこには警察官もやってこない。通常の秩序はない。きわめて不思議なもうひとつの秩序が形成されているのだ。」(Europe 同) コルテスによれば、ここに生まれているのは、もうひとつの世界への出発点となる、もうひとつの秩序が支配する世界における、ある場所への「つながり」である。それは演劇創造への出発点でもある。ひとつ新しいことがある。登場人物が多くなったことだ。家族の登場である。その作品を上演したのもシェローであった。しかし期待に反して上演は成功を収めなかった。重厚すぎる装置、可動式装置の移動を多用するセノグラフィーが原因だったのだろうか？あるいは中心的人物がいないため、話が複雑になってしまったからだろうか？しかし上演キャストには、コルテス自らの演劇的才能にとって輝かしい女優、マリア・カザレスが名を連ねていた。とうとうカザレスがコルテスの作品に出演するようになったのだ。この作品『西埠頭』が半ば失敗に終わったにしても、その後書かれた作品はそうではなかった。おそらくコルテス作品のなかでもっとも美しい『綿畑の孤独のなかで』が書かれたのだ。上演は、作者コルテスにも、またシェローにも栄光をもたらした。シェローは95年にも素晴らしい再演出を行っている。前作とは打って変わって、はっきりと規定されない、夕闇の街路という、どこでもない場所が場面となっている。コルテスの人物にはおなじみの「地平」のなかで、二人の男が出会う。人気のない街頭のなかの孤独、そして欲望の出会いだ。この作品は欲望の作品である。一方の男が相手の男に何かを売りつけようとする。男の「欲望」を満たすものなら何でも売ろうというのだ。しかし、どんな欲望なのだろう。最後の対決の瞬間まで、私たちには分からない。この作品に隠されている黒人は、題名のなかにあるアメリカの

「綿花」が黒人によって摘まれるところにある。上演ではデューラーをアイザック・バンコレが演じた。

この時期、コルテスは美しい小品『タバタバ』を書いている。これも名づけられない欲望をめぐる作品だが、こちらは兄と妹の近親相姦の欲望をめぐる作品である。

コルテスは遅かれ早かれ自分が死ぬ定めにあることを知っていた。エイズに感染していたのだ。『ロベルト・ズッコ』で主人公が言うように、「死にたくない。でも俺は死ぬ」のだ。こうした行く末への展望が、コルテスを子供時代への、家族への、田舎への地平に導いた。コルテスは『砂漠への帰還』を書く。アルジェリア戦争の追憶と、「奥深いフランスの田舎」とが、アルジェリアで暮らしていた女性が、弟のいる家族のもとへ帰ってくるという枠組みの中で描かれる。進歩しない観念にとらわれた田舎のブルジョワジーに起こる家族の衝突、政治的衝突だ。作品はジャクリーヌ・マイランが演じる女性を中心に展開する。上演が全体として見事なバランスを保ったのは、弟を演じたミシェル・ピコリの功績である。この作品に隠された黒人は「黒人の背が高いパラシュート隊員」だ。この一家の娘に黒人の双子を生ませるためにだけ登場する役割である。

またひとつ、経験の要素がある。コルテスは連続殺人犯ロベルト・スッコの写真を見た。「その年(1988年)の2月、私はメトロの構内で、警察官殺しの犯人を指名手配するポスターを見た。私はその顔写真に魅了された。しばらくして、私はテレビでその男の顔を見た。その男は刑務所に入れられてもたちまち看守の手をすりぬけて脱獄し、世間を挑発する。(…)信じられないような事件の連続、神話的な人物像、サムソンあるいはゴリアテのような英雄だ。力の怪物、それが最後には石ころ一つ、あるいは一人の女によって倒されてしまう。」(ル・モンド 88年9月26日)。コルテスはスッコの生の声の録音も聞き、その言葉を作品のなかでほとんど一言一句変えずに使っている。「遅かれ早かれ、人はみな死ぬ。みんなだ。それが鳥たちを歌わせるのだ、それが鳥たちを笑わせるのだ。」ここでのアフリカは？アフリカはこの殺人者の夢のなかに出てくる。「誰も知らないけど、アフリカに雪が降るんだ。それさ、僕が世界でいちばん好きなのは。アフリカの雪、氷が張った湖のうえに降るんだ。」

コルテスは『ロベルト・ズッコ』の上演を見ることがなかった。コルテスは1989年4月15日に死んでしまう。メキシコとグアテマラへの最後の旅から帰ってきてのことであった。

空間の悲劇

コルテスのエクリチュールに顕著な特徴は、いわば古典悲劇にも通じる「エコノミー」にある。このエクリチュールはまた同時に、ジュネやベケットを偉大なる先駆者として持つ、「集中」へと向かう現代的エクリチュールの総体とも関係をもっている。

時の一致については、どの作品も、筋書き上の時間と上演の時間を近づける連続性が保証されているが、『ロベルト・ズッコ』のように時の一致が守られてない場合でも、全体的には主人公の心理内容を感じられるようにしてある。あたかもズッコが作家と、そして観客と同じ瞬間において一緒に居るかのように書かれてある。

むしろ空間の問題が重要と考えたい。コルテスはこう言っている。「私は戯曲を書くことができない。登場人物に没入することができないのだ。私は登場人物にただの入れ物を見出すだけだ。」コルテスの悲劇は、世界における場所の悲劇である。どこでもいい場所ではない。『綿畑の孤独のなかで』においても、たしかに綿畑ではないが、場所については会話の中で詳細に示されている。そこは空虚で、しかも苦しみに満ちている場所である。客が「ある明かりのついた窓」から「もうひとつの明かりのついた窓」へと歩いて向かう街路であり、「エレベーターが下の階であなたを降ろす。そのとき、エレベーターは、上の階では望みもしなかったものばかりの只中を、腐りきった思い出のあふれる只中を歩くよう、あなたに罰を下した」のだ。この場所を不可解なものとしているのは客のほうである。「はっきりと定められる場所でもないこの場所の、はっきりと定められる時間でもないこの時間の、はてしもない孤独」なのだ。そして、その場所の危険を口にするのはディーラーのほうだ。「怒りに狂った人間たちと動物たちの敵意の中で」である。コルテスの劇中空間のもっとも極端な形象は、『森の直前の夜』の街路であろう。街路は孤独＝地平の空間でもあった。また、『黒人と犬の闘い』のアフリカの工事現場である。『西埠頭』の廃墟となったドック、麻薬密売の巣窟もそうだ。もっと私たちに馴染み深く、危険もなく、明確なのは、『砂漠への帰還』の田舎町のアパートマンやカフェだろう。『ロベルト・ズッコ』では、殺人犯はワルツでも踊るように逃走していくが、殺人犯のたどる道は、他者の領域として一步一步明確に示されている。しかし同時に、コルテスに言わせればそれは登場人物たちがつねにそこから去ろうとしている、かりそめの場所でもある。

登場人物が一瞬一瞬語るのは空間についてなのだ。空間、より正確に言えば場所は語り手の各々に、自分たちの他者へのつながりはいかにあるのか、どこにあるのかを語っている

のだ。

求愛の悲劇

コルテスのテキストの中で一瞬一瞬、あらゆる場所で語られるのは、他者とのつながりである。仕種も、言葉も、ときには沈黙までもが語る。そして直接間接を問わず、つながりとは要求のことだ。要求ははっきり口に出されないこともあれば、婉曲的に言われることもある。（『ロベルト・ズッコ』の最初の場面でズッコが母親に要求するズボンのように。）ときには、何が要求なのか分からないこともある。答えのない質問そのものが作品の意味になっているのだ。

登場人物が話しかける他者がまさしく他者であることを、つまりべつの「空間」に属する存在であることを、そして知らない人間であることを、知りたいと思っている人間であることを、さらには求愛がその人物に向けられるものであることを語っているのは、場所そのものだ。求愛は他者が不可能性そのものであればこそ、なおさら強いものになる。求愛の不可能性、それは人間にとってプリミティヴなものだ。小さい子供が母親に向けてする求愛だ。文字通り刷新することが不可能なもの、それこそがコルテスにおける他者への求愛の不可能性が語るものなのだ。他者の地平とは、まさしく自分の地平ではない。それはコルテスの初期の作品以来すでに表れている。『森の直前の夜』でも『黒人と犬の闘い』でもそうであった。そこにはレオヌが黒人のアルブリーに向けて歌う素晴らしい「歌」がある。

「ああ、黒い色、それは私のあらゆる夢の色。私の愛の色。誓うわ、あなたがお家に帰るなら、私もいっしょに行く。あなたが『私の家』って言ったら、私も言う、『私の家』って。」これこそが、コルテスにおける求愛である。それは作品のいたるところに見られる。そして悲劇、闘いが生まれる。求愛は永遠に「企業・組織」と対立する。システムの法則と対立するのだ。

しかし、その求愛こそが、コルテスの才能を生んだのだ。コルテスのエクリチュールの詩的な美しさ。少女が殺人犯ズッコに求める白鳥の歌のような求愛のなかにも詩がある。コルテスにおいては、内容はつねにそのエクリチュールのなかに存在するのであり、登場人物たちはテキストの音楽的な営為と結びつき、挿話を神話に変えるのである。（了）

付記 前号に続き、ユベルスフェルト先生の講演を掲載いたします。講演の最後に先生は『ロベルト・ズッコ』の一節を朗読されて、貴重な一時間のお話の結びとされました。なお、2010年11月、ユベルスフェルト先生はご逝去なされました。心よりご冥福をお祈りいたします。（ね）

静岡のオリヴィエ・ピイ

横山 義志 (SPAC-静岡県舞台芸術センター文芸部)

演劇とは言葉が肉体をもつこと。オリヴィエ・ピイのメッセージは、ほとんどこの一言に尽きている。なぜピイを静岡に呼ぶことになったのか、と問われれば、とりあえずは、このことを言うためだけに演劇をやっている人だから、と答えるのがいいような気がしている。2008年 SPAC-静岡県舞台芸術センターで上演した二作品『イリュージョン・コミック—舞台は夢』と『若き俳優への手紙』は、ピイの作品群のなかでも、このメッセージを最もストレートに表現している作品だった。『若き俳優への手紙』が有度山の木々を潤す雨のなかで演じられるのを見たとき、この作品はここで演じられるために書かれたのではないか、という錯覚をおぼえた。

ベンヤミンは「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」の冒頭で、「首都は人間に絶対に必要なものではない」というセナンクルの言葉をエピグラフとして引いている。「首都 capitale」という言葉は、ある地域が一定の領土のなかで、「頭」(ラテン語で caput)として機能していることを意味する。つまり、首都に生きるということは、頭のなかで生きていくことである。見渡す限りのものが記号に覆われた特異な空間。人間の身体、つまり頭から下の部分は、居心地のわるい自然として記号のあいだをうろうろしている。

グローバリゼーションというのは、世界が言葉に埋め尽くされる現象、それも首都の言葉に覆い尽くされる現象である。とはいっても、家を出てちょっと歩けば田んぼがあり、夏ともなれば昼はセミ、夜はカエルの声が支配するような、私が住む小さな町では、まだまだそんな言葉が届かない闇がないでもない。もちろん田んぼだって人間の頭の産物にはちがいないが、そこには数の上で人間を圧倒するだけの有象無象が住んでいる。そして知己に出会い、その日の天気について言葉を交わすような路地がある。

言葉が人を越えて伝わるようになってからもうずいぶん経って、その滑稽さを嘲笑うソクラテスの声だってすっかり忘れられてしまった。今、言葉に肉がくっついていることを示

すには、お尻でも見せるしかない、というのがピイのやり方である。そのために、ピイの俳優たちはけっして記号化されることのない、しまりのないお尻を保っている。(さらにいえば、ピイの舞台でたびたび晒される性器は体のなかで最もシェイプアップしにくい部位でもある。)

オリヴィエ・ピイとは奇妙なほど縁があった。そもそも1996年にはじめてフランスに行ってみて見た舞台が、上演時間二十四時間というピイの出世作『常夜灯—終わりのない物語』(の一部、イヴリーでの再演)だった。話はさっぱり分からなかったが、張りぼての巨大なペニスをつけたミシェル・フォーとエリザベット・マゼフ演じる天使の対話に、えらく観客が沸いていたのを今でも憶えている。その後2000年には世田谷パブリックシアターでピイ作品の日本ではじめてのリーディング公演があって、佐伯隆幸先生や藤井慎太郎さん、石井恵さんと一緒に働く機会を与えてもらった。今にして思うと、まず舞台を見ていたのがよかったのだと思う。はじめにテキストだけ読んでいたら、それがどんな舞台になるのか到底想像できなかっただろう。

観念的な比喩と卑俗なイメージとが縦横無尽に交錯するピイの作品を理解してもらうためには、やはり一度ピイ自身の演出作品を見てもらいたい、というのは、それ以来ピイの新作を見る度に思っていたことだが、SPACで働くようになってからはじめに行ったアヴィニオン演劇祭ではなぜかやたらとピイとすれちがい、三度目くらいにすれちがった拍子に声をかけ、そんなこんなで静岡に来ていただけることになった。SPACではラヴォーダン時代にも三度オデオン座を招聘しているので、オデオン座の公演は今回が五回目となる。こちらもなんだか不思議な縁である。

2008年上演したピイの二作品には、東京からも多くのお客さんがいらしたが、静岡のお客さんの反応がとてよかった。きっとテキストだけ読んでいたら到底最後まで読み通せないようなわけの分からない話を、全く文脈を共有していな

いお客さんが楽しんでくれて、正直ほっとした。ピイがオルレアン国立演劇センターのディレクターを十年にわたって務めていたのがよかったのではないかと思う。『常夜灯』以後、オルレアン時代のピイの作品は、キッチュなものに目ざとく飛びつくパリの観客以外にも開かれたものになったような気がする。フランスの多くの演出家が、一度は地方の劇場で長期的に仕事をする機会があることは、観客層の広がりにつながっていると思う。

『イリュージョン・コミック―舞台は夢』は、ピイがオデオン座芸術総監督に就任するに当たって、いわば маниフェストとして上演した作品である。バロック喜劇の傑作、コルネイユの『イリュージョン・コミック』と同様、ピイの『イリュージョン・コミック』(ただしこちらは複数形)も、演劇のイリュージョンに対するちょっとひねくれたオマージュになっている。すでに2006年にロン・ポワン劇場で初演していて、そのときには主人公の「詩人」がコメディ=フランセーズとオデオン座のディレクターに就任する、という話は全くの冗談だったが、何年も経たないうちに本当になってしまった。ピイ本人が言うとおりの(※1)、『若き俳優への手紙』と『イリュージョン・コミック』は同じテーマを扱っている。だが、『若き俳優への手紙』が非常にストレートなメッセージになっているのに対して、『イリュージョン・コミック』

は苦渋に満ちたファルスとなっている。この違いは、この間に経験した国立演劇センターのディレクターという職責によるところが大きいのだろう。「若き詩人」が文化行政の一端を担わされたとき、理想が皮肉へと変わる。ピイは「重要なことは、演劇は「世界を変えたい」という欲望から生まれるものでありながら、世界をじっさいに変えるものではない、ということ」と語っている(※2)が、これは公立劇場のディレクターを十年以上務めている人間としての実感でもあるのだろう。

今、ここで、「私」が「あなた」に向かって投げかける有限の言葉が、無限の時、無限の空間へと開かれた言葉と響きあっている。かつて劇場は、このありふれた奇蹟を奇蹟として経験させることによって、その公共性を担ってきた。今、劇場に公共性があるとすれば、むしろ無限の時、無限の空間にただよう言葉を、有限の身体が与える「約束」として取り戻す奇蹟によってなのかもしれない。来年3月に静岡で上演される『オリヴィエ・ピイのグリム童話』も、ちょっとそんな作品である。

(※1) 『シアターアーツ』誌 2008年秋(36号)掲載のインタビュー(聞き手:芳野まい)、p.50.

(※2) 同上、p.49.



オリヴィエ・ピイ 『イリュージョン・コミック―舞台は夢』より(橋本武彦撮影)

「コレクション 現代フランス語圏演劇」

刊行に寄せて

すでにご存じの向きも多いと思われるが、あらためて会員諸氏にご報告、及び、お願いを申しあげる。本年六月に出たミシェル・アザマの『十字軍／夜の動物園』、ワジディ・ムアワッドの『沿岸 頼むから静かに死んでくれ』をもって出された「コレクション 現代フランス語圏演劇」の刊行趣旨とその経緯のことである。昨秋、わたしは東京日仏学院の院長ロベール・ラコンブ氏によばれ、面談した。その際、ラコンブ氏から現存のフランス作家の戯曲集を日仏学院の財政援助で出したい旨の相談を受けた。版元はれんが書房新社と決まっております、訳者も数人は目安が立っているとの話であった。わたし個人は少なくともジュネ以後、ナタリー・サロートから現在まで日本では未紹介の「フランス語圏」の劇作品を訳すのはどうかと答え、加えて、こうした企画は個人的なルートを通るよりも、公的機関「日仏演劇協会」（たまたま現在はわたし事務局長である）で預かりたいと申しあげた。ラコンブ氏は、予算上、ラガルスのような例外はあれ、現存作家に限りたいとのこと、また後日、フランス語圏作家を対象にすること、日仏演劇協会が引き受けることに合意する旨のお返事があり、爾後、協会会長、副会長の了承を得、協会実行委員会を中心に発足した編集委員会で独自に、また日仏学院とで、どの作家を紹介するか、訳者をどう選定するかの協議を重ねた結果、エメ・セゼールを含む（このマルティニク作家の劇は完全に未紹介というわけではないが、『コンゴの一季節』の既訳は忘れられてしまっているし、編集委員会としては是非とも今回のシリーズに入れたいと考えた。幸い学院のほうも同じ発想であった）現在発表のプランができ、この六月に劈頭の二冊を出版して計画がスタートしたわけである。この間すでにそうであったが、これから多くの方のご助力をいただくことになるだろう。それに、個別の作家、ジュネやベケットはともかく、フランス語の芝居の系統的な刊行は久々でもあり（わたしの記憶では、白水社が出した「現代フランス戯曲選」全五冊等以来ではなかろうか。そうだとすれば、半世紀近い昔になる）、演劇現場に興味をもってもらうとともに、そもそも読者を見出さなければならないだろうと考えている。再開の第一歩である。紹介したいフランス語圏の劇作がこれで全部というわけではもちろんないのだが、当面は現ラインアップに全力を傾けたい。同時代の「異なる」演劇の現状がこの地で少しでも伝播、波及すれば幸甚。助成、作家リストなど、貴重な機会と助言を賜った東京日

仏学院に謝意はもとよりのこと、フランス語の（現代）演劇に関心のある方には是非手にとり、とまれお読み頂きたい、とくに会員諸氏には支援、並びに、関係各所に宣伝方をと、なによりもまずお願い申しあげる次第である。ご鞭撻を乞う。

日仏演劇協会事務局長として 佐伯隆幸



「コレクション 現代フランス語圏演劇」 Théâtre contemporain de langue française

日仏演劇協会・編

れんが書房新社・刊 TEL 03-3358-7531

- 1 **エメ・セゼール Aimé Césaire**
「キリストフ王の悲劇」*La Tragédie du roi Christophe*
(2012年刊行予定)
訳=根岸徹郎
- 2 **ミシェル・ヴィナヴェール Michel Vinaver**
「いつもの食事」* *L'Ordinaire*
「2001年9月11日」* *11 septembre 2001*
2010年12月刊行
訳=佐藤康
訳=根岸徹郎・高橋勇夫
- 3 **エレヌ・シクスー Hélène Cixous**
「偽りの都市、またはエリニュエスの覚醒」* *La Ville parjure ou le Réveil des Érinyes*
(2011年6月刊行予定)
訳=高橋信良
- 4 **フィリップ・ミンヤナ Philippe Minyana**
ノエル・ルノード Noëlle Renaude
「死者たちの家」* *La Maison des morts*
「プロムナード」*Promenades*
(2011年6月刊行予定)
訳=齋藤公一
訳=佐藤康
- 5 **ミシェル・アザマ Michel Azama**
「十字軍」*Croisades* / 「夜の動物園」*Zoo de nuit*
発売中!
訳=佐藤康
- 6 **ヴァレール・ノヴァリナ Valère Novarina**
「紅の起源」* *L'Origine rouge*
(2012年刊行予定)
訳=ティエリ・マレ
- 7 **エンゾ・コルマン Enzo Cormann**
「天使たちの叛乱」* *La Révolte des anges*
「フィフティ・フィフティ」* *Donnant, donnant*
(2012年刊行予定)
訳=北垣潔
- 8 **ジャン＝リュック・ラガルズ Jean-Luc Lagarce**
「世界の果てに」* *Juste la fin du monde*
「忘却の前の最後の悔恨」* *Derniers remords avant l'oubli*
(2011年12月刊行予定)
訳=福田悠歩
- 9 **コフィ・クワユレ Koffi Kwahulé**
「ザット・オールド・ブラック・マジック」* *Cette vieille magie noire*
「ブルー・ス・キャット」* *Blue-S-cat*
(2012年刊行予定)
訳=八木雅子
- 10 **ジョエル・ポムラ Joël Pommerat**
「商人」* *Les Marchands*
「この子」* *Cet enfant*
(2011年6月刊行予定)
訳=横山義志
訳=石井恵
- 11 **オリヴィエ・ピイ Olivier Py**
「お芝居」*Théâtres*
「若き俳優たちへの書翰」*Épître aux jeunes acteurs*
2010年12月刊行
訳=佐伯隆幸
訳=齋藤公一・根岸徹郎
- 12 **マリー・ンディアイ Marie N'Diaye**
「パパ帰る」* *Papa doit manger*
(2011年12月刊行予定)
訳=住田未歩
- 13 **ワジディ・ムアウッド Wajdi Mouawad**
「沿岸 頼むから静かに死んでくれ」*Littoral*
発売中!
訳=山田ひろ美
- 14 **ダヴィッド・レスコ David Lescot**
「破産した男」* *Un homme en faillite*
「自分みがき」* *L'Amélioration*
2010年12月刊行
訳=奥平敦子
訳=佐藤康
- 15 **ファブリス・メルキオ Fabrice Melquiot**
「セックスは時間とエネルギーを浪費する精神的病いである」*
Faire l'amour est une maladie mentale qui gaspille du temps et de l'énergie
(2012年刊行予定)
訳=友谷知己

*印の作品の邦訳タイトルは変更になる場合があります。

企画/東京日仏学院 TEL 03-5206-2500

協力/在日フランス大使館、フランス外務省-キュルチュールフランス、
SACD(劇作家・演劇音楽家協会)、ケベック州政府在日事務所

L'INSTITUT
東京日仏学院

Liberté - Égalité - Fraternité
RÉPUBLIQUE FRANÇAISE

C
F
U
R

SACD
SOCIÉTÉ ANONYME DE CŒURVILLE-VALENTIN

le culture avec
le couple privé

Québec

[書評]

渡邊守章

『快樂と欲望～舞台の幻想について～』

新書館 2009年

渡邊守章

『越境する伝統』

ダイヤモンド社 2009年

佐伯 隆幸

気のせいかな、昨年は演劇書が少なくない年だった。うち、わたしがもっとも強度を感じ、昂奮した二冊である。双方、幅広いが、強いていえば、前者が主としてバレエを軸にした演劇の身体性、どちらかといえば「エロス」的領域を扱った、雑文も混じる評論集。後者は、特定的には、日本とヨーロッパというふたつの軸のあいだを往還する者の、クローデルから能までの、いかにも著者にしか語りえない位相からの演劇理論書とっていいだろう。「快樂と欲望」は、『女房学校』のアニエスの「子猫が死にました」ならぬ、「猫は猫と呼ばなくてはならぬ」のフランス的いまわしを地でいくスタイルで、観ることであれ、演ずることであれ、演劇の身体にいわばつねにつきまとう文字通り「肉体」が発する幻惑を多角度から語ったもの。なによりもまず冒頭の論考、「ジェンダー」問題をかませながらハイナー・ミュラーの演劇が抱える「性」性を剔抉した『四重奏』論が圧巻の章である。フェデリコ・ガルシア等々の「ユーロ・クラッシュ」も糞も、いぜんとして演劇の身体にエロスは存在することを証した強い評論であり、あまり「ポスト＝ドラマ演劇」などといった流行語で舞台を丸めない方がいいということが実によく分かる。他方、『越境する伝統』は題名が表わすごとしなのではあるが、能・文楽から折口信夫に及ぶ論題を跨ぎ、著者専門のカミーユも含むクローデルや、昨今亡くなったレヴィ＝ストロース

に加藤周一、観世栄夫、太田省吾たちへの追悼を介して古典とはなにか、韻文とはいかなる表現か、われわれ、日本でフランスの演劇をも学んでいる者はだれなのかをめぐる根底的問いの書だともいえる。この地が非常に陥りやすい日本製オリエンタリズムという罠を避けながらの思考であり、至難だったろう力業の連続。わたしはいわば本書に煽られて世阿弥をまた何度か読み返した。むろん創造現場への発語も忘れられていない。太陽劇団の『堤のうえの鼓手たち』に言及したわさびの効く一節など、ハッとさせられた言は多々ある。

千川哲生

『論争家コルネイユ フランス古典悲劇と演劇理論』

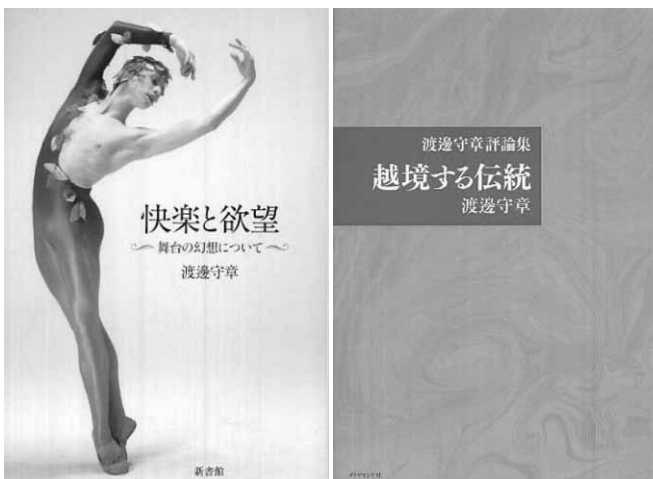
早稲田大学出版部 2009年

友谷 知己

本書は、近年フランス古典劇に関して日本で著された書物のうち、最も刺激的なもののひとつであると言って過言ではない。キーワードは、コルネイユに於ける「論証法」(argumentation)である。

17世紀から既にコルネイユ劇は、その雄弁術において並ぶものがないと言われてきた。天下国家を論じる登場人物の雄勁にして緊密な弁論の応酬、丁々発止と繰り広げられる舌戦のエスカレーションを、例えばドビニャック師は「かの美麗なる論争の数々」と呼んだし、現在もお我々はコルネイユのこうした弁論家としての天才に感嘆する訳だが、実はこれまで、コルネイユ的な論法——つまり論理的かつ説得的言説の形成の術——とは一体何なのか、ということが、体系的に論じられることはなかった。2007年ソルボンヌ大学提出の博士論文を基にした本書は、コルネイユがいかなる論証の技法を用いていたのか、そしてコルネイユとはいかなる論争家だったのか、という点を解明しようとする極めて独創的な論考である。

全体は二部に別れ、第一部がコルネイユの演劇理論テキスト、第二部が悲劇作品を対象とするが、千川氏は常に、理論と実践の二つの場を貫通するコルネイユ固有の諸原理を剔抉しようとする。ここではその成果の最も興味深いものにしか触れることが出来ないが、コルネイユ偏愛の論証技術として千川氏は、何らかの概念(例えば観客、正義、自由)の都合のいい定義、というものを指摘する。即ち氏によれば、コルネイユの天才の秘密のひとつとは、「ある語を柔軟に定義することで複数の推論を構築できる」(p. 140)能力、つまり



「相対的なものの見方」(p. 296)にあるのだ。この点に関して千川氏が注目する『侍女』『書簡』(p. 165, 195)は極めて重要である。モンテーニュを援用しつつコルネイユはそこで、究極的に人間の判断とは相対的なものでしかないのかも知れぬと嘆いていた。ところがこれは正に、あらゆる事象に反論を構想し得るコルネイユ自身の美学上の資質を告げているのである。登場人物が、帰納的推論を働かせ過去の事例の解釈から今後の行動を模索する際にも、また何らかの行為の当否を判断する時にも、コルネイユ劇に於いては唯一絶対の正解はない、というより寧ろ、ない方が劇的に優れている。何故なら、それこそが紛糾した事態の洗練だからである。こうした千川氏の所論は、これまで頻発されて来た、コルネイユの「真意」を同定しようとする思想的批評やテーマ批評に再考を迫るものであり、フォレストイエやドゥクレール以来の演劇美学解明の姿勢が貫かれている。

「フランス演劇の父」コルネイユの、演劇的な思考の手付きを整理したこの書は、今後の論考に多くの示唆を与えるに違いない。



小田中章浩 『現代演劇の地層 フランス不条理演劇生成の基盤を探る』

ペリカン社 2009年
根岸 徹郎

本書は1950年代のベケット、イヨネスコ、アダモフらのいわゆる「新しい演劇」、「不条理の演劇」と呼ばれる作家たちの活動を、「ピランデリズム」という新たな視座から見ることで、両大戦間演劇の延長線上に捉え直そうとする意欲的な論考である。早稲田大学に提出された博士学位請求論文(2008年授与)に基づいている。立脚点となるのは、ペーター・ションディが『現代劇の理論』の中で説く、「ドラマの危機」の回避方法という問題である。著者はそこに、ベルナール・ドルトのピランデルロをめぐる考察を発展させたピランデリズムという概念を重ねる。ここでいうピランデリズムとは、登場人物の言葉が意図とは別の何かを指し示しているように観客に見えることで、彼らの行為がゲームのように思

われることだと定義される。

こうして、不条理の演劇といわれる作家たちの登場人物の内面と時間の表し方が、すでにピランデルロからジロドゥー、ゲルドロード、クロムランク、サラクルー、ルノルマンといった大戦間の作家、さらにイブセンにまで遡って見られるものと同じムーブメントを持つものであることを浮かび上がらせる。新しいものは進化したものであり、前のものよりも良いはずだという考え方に疑問を投げかける著者は、敢えて時代を遡行する形で作家を取り上げ、またフランスの周縁のベルギーの作家を分析の対象にすることで、「新しい演劇」の作品が「ドラマの危機」を乗り越える試みの一環と位置づけることに成功している。

ここでピランデリズムという考えは、従来は「新しい」という言葉によって断絶されていた両大戦間演劇と不条理の演劇に、共通の枠を与えるための接点として機能する。そしてそこから20世紀演劇に通底する問題を明らかにした上で、現代演劇の転回点として第一次世界大戦がいかに重要な役割を果たしたかという問題にまで切り込む流れは、ダイナミックだ。今後、著者が解き明かしてくれるであろう、第一次大戦と20世紀演劇の関わりが注目される。

また、ジャーナリストイックな文章や特定のテーマに沿った読解的論文が多い中、不条理演劇そのものを正面から捉えようとした論考は、実はそれほど多くない。そういった意味でも、「ドラマの危機」という広い演劇的課題から不条理演劇へとアプローチする本書は貴重だといえよう。



[紹介] バレエ・リュス 100年

北原 まり子

バレエ・リュスは1909年に初めて上演を行い(パリ)、1929年に団長ディアギレフが亡くなるまでヨーロッパとアメリカ大陸を巡業したバレエ団である。昨年100周年を迎えたが、世界各地では引き続きバレエ・リュスに関するイベントが行われている。パリでのディアギレフの活動は「セゾン・リュス」と称され、絵画(1906)、音楽(1907)、歌劇

(1908)と西欧にロシア文化を紹介する流れの中で、第4回目にバレエの上演に至る。1910年以降はバレエが中心になるが、その「総合芸術」の理想の中で当時の中心的な作曲家や画家に作品を依頼し、若きストラヴィンスキーの才能を開花させ、ピカソや「フランス六人組」の作曲家と協働するなど、音楽と美術の分野にも大きな影響を及ぼした。また、巡業集団であったためロシア革命(1917)と第一次大戦(1914-19)という全世界的変動の波を大きく受けたが、スペイン王室やモナコ大公一家の庇護を頼り、アメリカで巡業を行うことで難局を乗り越えた。バレエ・リュスの周年記念が世界各地、さまざまな芸術分野に亘って祝われる所以である。

バレエ・リュスに関する2009年のイベントには、①展覧会(舞台美術、衣裳)、②パフォーマンス(舞台上演、演奏会)、③講演会、シンポジウムがある。舞台上演には、当時の舞台の再現上演と、バレエ・リュスの演目への新たな創作がある。特に再現上演は、映像記録の乏しい当時を知る上で貴重な機会であるが(1987年に行われたニジンスキー版《春の祭典》の再現上演など舞踊研究に大きな影響を与えるものも多い)、100周年に合わせてそれらの多くが世界各地の劇場で上演された。日本では、「薄井憲二バレエ・コレクション」(兵庫県立芸術文化センター内)がバレエ・リュス関連資料を所蔵しており、キュレーター芳賀直子氏が展示活動や関連書籍の出版を行った。また、NBAバレエ団による《牝鹿》(ゆうぼうとホール)の再現上演をはじめ、様々なパフォーマンスも行われた。この年に先だち庭園美術館等を巡回した展覧会も印象に残っている(2007)。

バレエ・リュスは日本では公演を行っていないが、日本におけるバレエ・リュスの同時代的受容は興味深い。欧米を中心として深められてきたバレエ・リュス研究だが、アジアにおける間接的な受容の研究が今後新たな意味を持つのではないかと感じている。

「バレエ・リュス展 Les ballets russes」

主催：パリ・オペラ座図書館博物館 (BmO)

会期：2009年11月24日～2010年5月23日

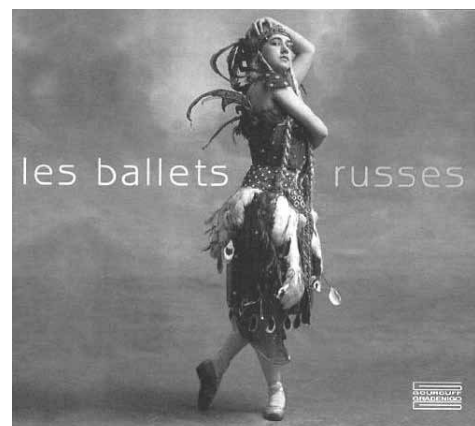
八木 雅子

バレエ・リュス創立100年にあたる2009/10シーズンは、各地で多くのバレエ・リュス関連の展覧会が開催された。主なところでは、バレエ・リュス関連の主要なコレクションを持つロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館

(2010.9.25-2011.1.9)、ディアギレフの二人の相続人の一人、セルジュ・リファールから寄贈されたコレクションを所蔵するコネチカット州ワズワース・アテネウム美術館(09.2.19-6.21)、変わり種としては、国立舞台衣装装置センター(CNCS)のディアギレフがプロデュースしたロシア・オペラのパリ公演の衣装130点を中心とする展覧会(2009.12.12-2010.5.16)。オーストラリア国立図書館での展覧会はオーストラリアにおけるバレエ・リュス研究プロジェクト4年の成果の一つでもある(2009.4.9-2010.1.31)。ほかにモスクワの国立トレチャコフ美術館、エカテリーナ文化財団およびモナコ新国立美術館の共同企画による展覧会、さらにはストックホルムなど、ゆかりの地は網羅されている。

パリ・オペラ座での展覧会は、ガルニエ内のさほど広くないスペースで行われるため展示手法にも展示品の数にも限界があり、当然、舞台を再現するなどの大規模なものにはできないが、その狭さを武器に効率的かつ建物の構造もうまく活用している。またほぼ自前のコレクションで構成されていることも特徴だ。ディアギレフのもう一人の相続人ボリス・コフノ(フランス語ではコシュノ)のコレクションを核とするパリ・オペラ座図書館博物館(BmO)のそれは、パリにおけるバレエ・リュスの活動を辿るには十分にちがいない。もちろんその役割を担うのはむしろ図録(写真)である。

一般的に言って展覧会の図録はその大きな収穫の一つである。300ページにおよぶ今回のそれはBmOのコレクション目録でもあり、パリにおけるバレエ・リュスに関する資料集であり(出典明記の上演リストやダンサー・写真家辞典付き)、詳細な解説書にもなっている。個人的には資料来歴やBmOならではの視点もあってひどく楽しい。図録は一般書店サイトでも購入可能。



フランス語圏舞台芸術・文献目録 (2007 - 2009)

堀切克洋・北原まり子 (編)

今回の会報から文献目録が再開されました。時代や分野をこえた会員どうしの知的交流に役立てていただければと思います。原則として、仏訳された日本の戯曲とバレエ関連の記事を除く「フランス語圏舞台芸術」に関わる文献であれば、網羅的に掲載してありますが、追加・訂正すべき項目がございましたら、事務局まで情報をお寄せください (H)。

1. 著作・翻訳

一般書

- 大村真理子『フィガロブックス パリ・オペラ座バレエ物語—夢の舞台とマチュー・ガニオ』、阪急コミュニケーションズ、2009年
- 佐々木忠次『闘うバレエ—素顔のスターとカンパニーの物語』、文藝春秋、2009年
- ダンスマガジン編『モーリス・ベジャール 1927～2007』、新書館、2008年
- ダンスマガジン編『パリ・オペラ座のマニユエル・ルグリ』、新書館、2009年
- 西元まり『シルク・ドゥ・ソレイユ—サーカスを変えた創造力』、武田ランダムハウスジャパン、2008年
- 田中未知子、クリストフ・レノー・ド・ラージュ『サーカスに逢いたい—アートになったフランスサーカス』、現代企画室、2009年
- マニユエル・ルグリ『パリ・オペラ座バレエへの招待状』、度会輪子構成、阪急コミュニケーションズ、2008年

研究書・評論

- 千川哲生『論争家コルネイユ—フランス古典悲劇と演劇理論』、早稲田大学出版部、2009年
- 梶谷二郎『Pierre Corneille の作品に見られるキリスト教思想—その演劇理論と2人のオランダ人演劇理論家』、大阪教育図書、2009年
- 白田由樹『サラ・ベルナール—メディアと虚構のミューズ』、大阪公立大学共同出版会、2009年
- 中畑寛之『世紀末の白い爆弾—ステファヌ・マラルメの書物と演劇、そして行動』、水声社、2009年
- 鈴木晶『バレリーナの肖像』、新書館、2008年
- 芳賀直子『バレエ・リュス その魅力のすべて』、国書刊行会、2009年

- 塚原史『反逆する美学—アヴァンギャルド芸術』、論創社、2008年
- 山縣熙『劇作家サルトル』、作品社、2008年
- 堀真理子『ベケット巡礼』、三省堂、2007年
- 田尻芳樹『ベケットとその仲間たち』、論創社、2009年
- 佐々木涼子『バレエの歴史—フランス・バレエ史-宮廷バレエから20世紀まで』、学習研究社、2008年
- 譲原晶子『踊る身体のディスクール』、春秋社、2007年
- 矢橋透『演劇の精神史—バロックからヌーヴェルヴァーグまで』、水声社、2008年
- 渡邊守章『快樂と欲望—舞台の幻想について』、新書館、2009年
- 渡邊守章『渡邊守章評論集 越境する伝統』、ダイヤモンド社、2009年
- アラン・ヴィアラ『演劇の歴史』、高橋信良訳、白水社、2008年
- クリスチャン・ビエ、クリストフ・トリオー『演劇学の教科書』、佐伯隆幸監修、国書刊行会、2009年
- アラン・リビエツ『なぜ男は女を怖れるのか—ラシーヌ「フェードル」の罪の検証』、千石玲子訳、藤原書店、2007年
- フィリップ・ラクー＝ラバルト『歴史の詩学』、藤本一勇訳、藤原書店、2007年
- ミッシェル・サヌイエ『パリのダダ』、安堂信也・浜田明・大平具彦訳、白水社、2007年〔新装復刊版〕
- アラ・ローゼンフェルド、柴勤他編『舞台芸術の世界—ディアギレフのロシアバレエと舞台デザイン』、アートインプレッション、2007年
- アラン・バティウ『ベケット—果てしなき欲望』、西村和泉訳、水声社、2008年
- ジェイムズ・ノウルソン、エリザベス・ノウルソン編『サミュエル・ベケット証言録』、田尻芳樹・川島健訳、白水社、2008年
- ディアドリイ・ベア『サミュエル・ベケット：ある伝記』、五十嵐賢一訳、三元社、2009年
- ミッシェル・フーコー『哲学の舞台』、渡辺守章訳、朝日出版者、2007年〔増補改訂版〕
- Catherine HENNION, *La Naissance du Théâtre moderne à Tokyo (1842-1924) : Du kabuki de la fin d'Edo au Petit Théâtre de Tsukiji*, Champ Théâtral, 2009.
- Kensuke KUMAGAI, *La Fête selon Mallarmé : République, catholicisme et simulacre*, Harmattan, 2008.
- Yoshiki TAJIRI, *Samuel Beckett And the Prosthetic Body: The Organs And Senses in Modernism*, Basingstoke: Palgrave

Macmillan, 2007.

Yoshi OIDA, Lorna MARSHALL, *Yoshi Oida : L'acteur flottant ; L'acteur invisible ; L'acteur rusé*, Actes Sud, 2008.

戯曲

ラシーヌ『ブリタニキウス ベレニス』、渡辺守章訳、岩波書店、2008年

——『フェードル』、笹部博司の演劇コレクション、メジャーリーグ、2008年

モリエール『病は気から』、鈴木力衛訳、岩波書店、2008年〔改版〕

——（モリエール）『タルテュフ』、石川淳訳、昭和初期世界名作翻訳全集、ゆまに書房、2009年

——（モリエール）『人間ざらひ』、石川淳訳、昭和初期世界名作翻訳全集、ゆまに書房、2009年

——（モリエール）『ドン・ジュアン』、石川淳訳、昭和初期世界名作翻訳全集、ゆまに書房、2009年

マリヴォー『贗の侍女・愛の勝利』、佐藤実枝訳、井村順一訳、岩波書店、2009年

ボーマルシェ『セビーリヤの理髪師』、鈴木康司訳、岩波書店、2008年

ユゴー『エルナニ』、稲垣直樹訳、岩波書店、2009年

アレクサンドル・デュマ・フィス『椿姫』、西永良成訳、光文社古典新訳文庫、光文社、2008年

——『椿姫』、笹部博司の演劇コレクション、メジャーリーグ、2008年

——（デュマ）『椿姫』、林文雄訳、昭和初期世界名作翻訳全集、ゆまに書房、2009年

ヴィクトリアン・サルドウ『トスカ』、笹部博司の演劇コレクション、メジャーリーグ、2008年

エドモン・ロスタン『シラノ・ド・ベルジュラック』、渡辺守章訳、光文社古典新訳文庫、光文社、2008年

ジャン・アヌイ『ひばり』、岩切正一郎訳、ハヤカワ演劇文庫、早川書房、2007年

ジャン・ジロドゥ『オンディーヌ』、二木麻里訳、光文社古典新訳文庫、光文社、2008年

アルベール・カミュ『カリギュラ』、岩切正一郎訳、ハヤカワ演劇文庫、早川書房、2008年

ギイ・フォワシイ「ドラマシアター 『証言』」、中條忍訳、『テアトロ』、2008年10月号、pp.108-125

ロベール・トマ、アルベール・ユッソン『現代フランス戯曲名作選：和田誠一翻訳集』、和田誠一訳、花柳伊寿穂編、カモミール社、2008年、pp.86-113

ピエール・ノット「私もカトリーヌ・ドヌーヴ」、柴田耕太

朗訳、『テアトロ』、2007年4月号、pp.98-125

——「ジェラルド・フィリップへの愛ゆえに」、真知子ラヴォー訳、『テアトロ』、2009年5月号、pp.86-113

——「背中のナイフ」、『テアトロ』、2008年10月号、pp.128-153

マテイ・ヴィスニユック「年老いたクラウン」、川口覚子訳、『テアトロ』、2007年2月号、pp.114-126

——「フランクフルトに恋人がいるサクソ奏者が語るパンダの物語」、川口覚子訳、『テアトロ』、2009年2月号、pp.93-117

——「年老いたクラウン：おまえの乳房のうえで調教したエスカルゴ」、大木宏斗訳、『テアトロ』、2009年10月号、pp.101-112

ジャン・ポール・アレーグル「行き交い」、岡田正子訳、『テアトロ』、2008年8月号、pp.112-136

ミシェル・アザマ「隔室」、佐藤康訳、『海外戯曲アンソロジー3』、日本演出者協会、2009年、pp.157-180

ヤン・ファール『わたしは血』、宇野邦一訳、書肆山田、2007年

——「寛容のオルギア」、小山さち子訳、『シアターアーツ』、第39号、2009年、pp.15-33

翻訳その他

ラシーヌ「ラシーヌのアカデミー演説」、柳光子訳、『Stella』、第26号、九州大学フランス語フランス文学研究会、2007年、pp.75-90

エミール・ゾラ「演劇における自然主義」、『文学論集—1865-1896』、宮下志朗・小倉孝誠責任編集、佐藤正年編訳、藤原書店、2007年、pp.25-74

ポール・ヴァレリー『魂と舞踏 樹についての対話』、清水徹訳、岩波書店、2008年

アントナン・アルトー『アルトー後期集成1』、宇野邦一・鈴木創士・岡本健訳、河出書房新社、2007年

——『アルトー後期集成3』、宇野邦一・鈴木創士・荒井潔訳、河出書房新社、2007年

ジャン・ジュネ「『黒んぼたち』のための未発表の序文」、根岸徹郎訳、『舞台芸術』、第13号、2008年、pp.121-135

2. 学術論文

中世・17世紀・18世紀

戸口民也「フランス最初の俳優たち：中世から偉大なる世紀の夜明けまで（第1部 10-13世紀）」、『長崎外大論叢』、第13号、長崎外国語大学、2009年、pp.103-114

片山幹生「中世の演劇的テキストへの言語学的アプローチ」、

- 『早稲田フランス語フランス文学論集』、第 15 号、早稲田大学文学部フランス文学研究室、2008 年、pp.66-80
- 黒岩卓「アルヌール・グレバン『受難の聖史劇』における詩作技巧：ユダを例に」、『フランス語フランス文学研究』、第 93 号、日本フランス語フランス文学会、2008 年、pp.127-138
- ミシェル・スタネスコ「神話的意識から聖史劇の美学へ」、千川哲生訳、『国際研究集会 越境する演劇』、早稲田大学演劇博物館、2008 年、pp.25-36
- 川那部和恵「フランス 15～16 世紀の演劇状況—世俗劇の上演現場—」、『奈良教育大学紀要（人文・社会科学）』、第 57 巻第 1 号、奈良教育大学、2008 年、pp.191-198
- 小澤祥子「中世ファルスの「性欲への笑い」とキリスト教社会」、『仏語仏文学』、第 34 号、関西大学、2008 年、pp.223-244
- 金山弘昌「フィレンツェのジャック・カロ：新たな上演芸術表象の誕生」、『紀要』、第 7 号、日本橋学館大学、2008 年、pp.13-38
- 「ジャック・カロが描くコンメディア・デッラルテの二つのイメージ：3 人のパンタローネとスフェツサニーアの踊り」、『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』、第 24 号、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、2009 年、pp.133-154
- ミカエル・デブレ « Chereau ou de la noblesse du comédien. Contribution à l'étude des origines du théâtre moderne. (circa 1500-1530) », 『上智大学仏語・仏文学論集』、第 42 号、上智大学、2007 年、pp.1-47
- « Théâtre-événement et théâtre d'auteurs ou le comédien devant l'imprimé (1570-c.1620) », 『上智大学仏語・仏文学論集』、第 43 号、上智大学、2008 年、pp.1-29
- 「イエズス会演劇の起源と独自性——チンクエチェント時代」、岡見さえ訳、『ソフィア』、第 57 巻第 4 号、上智大学、2008 年、pp.429-449
- 小倉博孝「悲劇の危険性——成功主義者ラシーヌ伝説の意味」、『上智大学仏語・仏文学論集』、第 43 号、上智大学、2008 年、pp. 31-47
- 「ポール＝ロワヤルの寵児—ラシーヌはいつ修道院に来たのか」、『流域』、第 64 号、青山社、2009 年、pp.54-64
- 佐藤久美子「ラシーヌ悲劇における「極限状態」を表す文学的表現技巧について——『アンドロマック』の分析を通じて」、『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』、第 41 号、愛知県立大学、2009 年、pp. 49-72
- シャルル・マズエ「コルネイユとラシーヌにおける古代ローマ」、小倉博孝訳、『ソフィア』、第 58 号、上智大学、2009 年、pp. 176-188
- 友谷知己 « La survie des innocents persécutés chez Racine : la pastorale et la grécité dans *Bérénice* », 『仏語仏文学』、第 33 号、関西大学、2007 年、pp.19-49
- « Les épisodes dans *La Pratique du théâtre* de d'Aubignac », 『仏語仏文学』、第 34 号、関西大学、2008 年、pp. 69-95
- 萩原芳子「ポール・ロワヤルの学校とレトリック」、『明治大学人文科学研究所紀要』、第 62 号、明治大学人文科学研究所、2008 年、pp.243-267
- 山中知子「『フェードル』再考：セネカ『パエドラ』のモチーフをめぐって」、『追手門学院大学国際教養学部紀要』、第 1 号、追手門学院大学、2007 年、pp. 27-46
- 秋山伸子 « Les mises en scène du *Bourgeois Gentilhomme* et du *Malade imaginaire*: le problème des intermèdes et des scènes musicales », *Les Mises en scène de Molière du XXe siècle à nos jours*, 2007, pp.111-133.
- « Ecouter et voir sans être aperçu: une situation théâtrale dans quelques nouvelles de *Même de Villedieu* », *Madame de Villedieu ou les audaces du roman*, 2007, pp.191-203.
- « Quelques réflexions sur l'héritage du ballet de cour dans les œuvres de Molière », *Le Nouveau Moliériste*, 2008, pp.103-117.
- « *Le Misanthrope* à la lumière de l'Alcidamie de Madame de Villedieu », *Les Mises en scène de Molière du XXe siècle à nos jours*, 2009, pp.126-148.
- « Jadis chez aujourd'hui ; de Louis XIV à la tour Eiffel », *De jadis à demain, l'imaginaire du dessinateur Albert Robida*, 2009, pp.58-63.
- 千川哲生「コルネイユ劇における摂理の歴史観」、『人文研紀要』、第 62 号、中央大学人文科学研究所、2008 年、pp. 161-182
- 「コルネイユの悲劇における歴史的人物の描写」、『演劇映像学 2008』、早稲田大学グローバル COE、第 2 集、2009 年、pp. 115-128
- 「コルネイユ『エディップ』における神意の表象」、『人文研紀要』、第 66 号、中央大学人文科学研究所、2009 年、pp. 171-188
- ピエール・アルトマン「フランス古典主義演劇における封建制の表象—コルネイユとヴォルテール」、千川哲生訳、『国際研究集会 越境する演劇』、早稲田大学演劇博物館、2008 年、pp.141-154
- 村瀬延哉「虚構と真実——神話・史実とコルネイユの戯曲を巡って」、『クインテット』、第 27 号、「クインテット」刊行会、2007 年、pp. 1-21
- 「コルネイユとラシーヌ——『シュレナ』に関する一考察」、『クインテット』、第 28 号、「クインテット」刊行会、

2008年、pp.27-56

——「コルネイユ劇の主人公——フランス古典劇の登場人物を巡る一考察」、『クインテット』、第29号、「クインテット」刊行会、2009年、pp.38-62

浅谷真弓「コルテの『雄弁と古代人の模倣』について」、『中大仏文研究』、第39号、中大仏文研究会、2007年、pp.1-16

——「『演劇作法』の悲劇性について」、『中大仏文研究』、第40号、中大仏文研究会、2008年、pp.1-16

——「『演劇作法』の悲劇性について(続)」、『中大仏文研究』、第41号、中大仏文研究会、2009年、pp.1-14

富田高嗣「ドゥーヴィルとスペインのコメディア」、『人文研紀要』、第59号、中央大学人文科学研究所、2007年、pp.213-245

——「カルデロン作『だんだん悪くなる』の17世紀フランス演劇への影響」、『人文研紀要』、第62号、中央大学人文科学研究所、2008年、pp.183-209

——「スカロン作『ジョドレあるいは主人になった下僕』」、『人文研紀要』、第66号、中央大学人文科学研究所、2009年、pp.189-211

中山智子「マルク=アントワヌ・ルグラン作『現代のアマゾネスたち』における異性装の演劇的戦略」、『研究論叢』、第70号、京都外国語大学、2007年、pp.209-219

大崎さやの「ディドロの演劇理論に見られるゴルドーニの影響——『真実の友』と『私生児』の比較を通して」、『西洋比較演劇研究』、第7号、日本演劇学会分科会西洋比較演劇研究会、2008年、pp.41-52

渋谷直樹「Voltaire, dramaturge et philosophe」、『仏語仏文学』、第34号、関西大学、2008年、pp.245-263

奥香織「マリヴォー『贗の侍女』と『愛の勝利』——眼差しのドラマツルギーにみる人間像」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、第53号、第3分冊、2008年、pp.33-47

——「マリヴォー『二重の不実』——社会と自己の「デクーヴェルト」」、『演劇映像学2007』、第2集、早稲田大学グローバルCOE、2008年、pp.187-207

太原孝英「民衆にイメージを与えた劇作家——オランプ・ド・グージュ『修道院』、『デムーリエのブリュッセル入り』——」、『フランス女性の世紀』、植田祐次編、世界思想社、2008年、pp.243-252

フランソワ=グザヴィエ・キューシュ「『アカデミーへの書簡』におけるフェヌロンの演劇美学」、千川哲生訳、『国際研究集会 越境する演劇』、早稲田大学演劇博物館、2008年、pp.91-102

19世紀・20世紀

熊谷謙介「教育、歴史、全体芸術——フランスロマン主義における演劇と祝祭」、『超域文化科学紀要』、第12号、東京大学大学院総合文化研究科、2007年、pp.197-213

白田由樹「サラ・ベルナルとエドモン・ロスタン——『レグロン』の制作をめぐる」、『関西フランス語フランス文学』、第13号、2007年、pp.47-58.

——「サラ・ベルナルと肖像メディアの時空：ミュシャのポスターを中心に」、『人文研究』、第58号、大阪市立大学、2007年、pp.158-176

——「サラ・ベルナル後期の男役と舞台制作——『ハムレット』を中心に」、『Lutèce』、第35号、大阪市立大学フランス文学会、2007年、pp.41-58

——「サラ・ベルナルの戯曲と舞台上のマニフェスト——自作劇『アドリエヌ・ルクヴルール』をめぐる」、『Lutèce』、第36号、大阪市立大学フランス文学会、2008年、pp.21-38

——「サラ・ベルナルとフェミニテの戦術——女性の領域としての舞台芸術」、『女性空間』、第26号、日仏女性資料センター、2009年、pp.104-115

坂巻康司「“Notes sur le théâtre” de Mallarmé ou l'avènement de la critique comme “action”」、『フランス語フランス文学研究』、第91号、日本フランス語フランス文学会、2007年、pp.79-94

——「私はここでその幻影を覗いているのか?：マラルメの『エロディアード』上演をめざして」、『大阪音楽大学研究紀要』、第46号、大阪音楽大学、2007年、pp.55-71

——「私は未知なるものを待っている——マラルメの『エロディアード』上演をめざして(2)」、『大阪音楽大学研究紀要』、第47号、大阪音楽大学、2009年、pp.25-42

坂口周輔「何ものでもない形象——マラルメのワーグナー論をめぐる」、『レゾナンス』、第5号、東京大学大学院総合文化研究科、2007年、pp.60-66

オリヴィエ・カシュレル「Voir avec les yeux du langage : *Interieur et Les Sept princesses de Maeterlinck*」、『Stella』、第26号、九州大学フランス語フランス文学研究会、2007年、pp.19-34

中筋朋「メートルランク的一幕劇における「生の劇」の可能性——受動的感嘆が〈劇〉になるとき」、『仏文研究』、第38号、京都大学フランス語学フランス文学研究会、2007年、pp.15-34

佐原怜「揺れ動く「記号」——前期アルフレッド・ジャリにおける絵画・記号・仮面、そして言語作品」、『言語態』、第8号、言語態研究会、2008年、pp.45-62

ジュヌヴィエーヴ・ジョリー「19世紀末のテキストと舞台

空間を再考する」、間瀬幸江訳、『国際研究集会 越境する演劇』、早稲田大学演劇博物館、2008年、pp.245-258

長谷川淳基「ローベルト・ムージルとアルフレート・ケルナーポール・クロードルの演劇作品をめぐる」、『椋山女学園大学研究論集 人文科学篇』、第38号、椋山女学園大学、2007年、pp.133-154

矢橋透「演劇の精神史：クロードル『縞子の靴』」、『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』、第55巻第2号、岐阜大学、2007年、pp.137-146

藤本智成「アンドレ・ジイドの演劇作法——『法王庁の抜け穴』とその二つの戯曲版」、『関西フランス語フランス文学』、第13号、仏文学会関西支部、2007年、[s.p.]

中村典子「ジャン・ジロドゥ『クック航海記異聞』再考」、『言語文化』、第13号、甲南大学、2009年、pp.87-99

間瀬幸江「『エレクトル』の真実——ジロドゥの「ディヴァガシオン」、『演劇研究センター紀要 VIII』、早稲田大学21世紀COE、2007年、pp.17-24

——「ジロドゥとストリンドベリ——「夢」の表象をめぐる」、『演劇映像学 2007』、第2集、早稲田大学グローバルCOE、2008年、pp.209-228

——「作家の自画像としての演劇テキスト——『ジークフリート』考」、『演劇映像学 2008』、第2集、早稲田大学グローバルCOE、2009年、pp.205-221

——「額縁舞台と彼岸の秩序——クリスチャン・ベラルの緋色の天蓋に関する一考察——」、『国際研究集会 越境する演劇』、早稲田大学演劇博物館、2008年、pp.199-208

荻谷俊信「*Théâtre épistolaire de la cruauté : A propos des lettres d'Antonin Artaud pendant son internement*」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、第55号、第2分冊、2009年、pp.79-91

齋藤公一「アラバールの演劇」、『早稲田フランス語フランス文学論集』、第15号、早稲田大学文学部フランス文学研究室、2008年、pp.187-200

粟国孝「『カリギュラ』と不条理」、『フランス文学論集』、第43号、仏文学会九州支部、2008年、pp.35-52

大野麻奈子「*Actes Sans Paroles, Paroles Sans Scène*」、*Samuel Beckett Today/Aujourd'hui*, 19, Rodopi, 2008, pp.403-413.

岡室美奈子「Joycean Narrative in Beckett's *Ohio Impromptu* : Who Veils the Name of the 'dear' Person?」、『演劇研究センター紀要』、早稲田大学21世紀COE、2007年、pp.131-139

——「*Words and Music, . . . but the clouds . . . and Yeats's "The Tower"*」、*Beckett at 100 : Revolving It All*, New York: Oxford UP, 2008, [s.p.]

——「霊媒ベケットとグラモフォン」、『水声通信』、第22号、2008年、pp.81-87

——「*...But the Clouds... and a Yeatsian Phantasmagoria*」、*Samuel Beckett Today/Aujourd'hui*, 19, Rodopi, 2008, pp.259-268.

小田中章浩「ベケットの『勝負の終わり』におけるゲームの規則」、『人文研究』、第58号、大阪市立大学、2007年、pp.196-211

垣口由香「*Chorus in Rockaby : Singing Together*」、『Osaka Literary Review』、第46号、大阪大学大学院英文学談話会、2007年、pp.51-62

片岡昇「円環・螺旋・直線——『なにどこ』における語り手の「冬の旅」、『演劇映像学 2007』、第2集、早稲田大学グローバルCOE、第2集、2008年、pp.57-84

——「サミュエル・ベケットの『夜と夢』における「見えない顔」、『演劇映像学 2008』、第2集、早稲田大学グローバルCOE、2009年、pp.99-114

川島健「幽霊家族ネットワーク：『残り火』あるいはベケットの喪の戦」、『演劇研究センター紀要』、早稲田大学21世紀COE、2007年、pp.141-146

——「*Polyrhythm in Waiting for Godot*」、『演劇映像学 2007』、第2集、早稲田大学グローバルCOE、2008年、pp.27-39

——「*"What kind of Name is that?": Samuel Beckett's Strategy of Naming*」、*Samuel Beckett Today/Aujourd'hui*, 19, Rodopi, 2008, pp.327-337.

木内久美子「*The Idea of "Game" and "Play" in Samuel Beckett's Theatre: from Waiting for Godot to Play*」、『演劇研究センター紀要』、早稲田大学21世紀COE、2007年、pp.47-56

菊池慶子「ベケット『フィルム』試論」、『フランス文学語学研究』、第27号、早稲田大学大学院『フランス文学語学研究』刊行会、2008年、pp.23-36

——「声と視線——ベケット『芝居』における反転の劇世界」、『演劇映像学 2008』、第2集、早稲田大学グローバルCOE、2009年、pp.83-98

岸本佳子「サミュエル・ベケットと聴覚メディア——『すべて倒れんとする者』と『クラブの最後のテーブル』」、『演劇映像学 2008』、第2集、早稲田大学グローバルCOE、2009年、pp.59-82

木戸好信「ベケットの映画術——『フィルム』のフィルム体験」、『主流』、第68・69号、同志社大学英文学会、2007年、pp.57-80

景英淑「ベケットの『オハイオ即興劇』における作家の自画像——「盲人の手」、「作家の手」が描く虚構の他者について」、『演劇学論集』、第46号、日本演劇学会、2008年、pp.147-164

——「ベケットの時計仕掛けの身体——『勝負の終わり』にみられる「時間」、「主体の不在」をめぐる考察」、『水声通

信』、第22号、水声社、2008年、pp.95-108

呉孟晋「『ゴドーを待ちながら』と戦後台湾の前衛美術—雑誌『劇場』と黄華成のインスタレーション作品について—」、『演劇映像学2008』、早稲田大学グローバルCOE、2009年、pp.347-368

鈴木哲平「La disparition du narrateur et la naissance du théâtre beckettien : autour de deux premières pièces théâtrales de Samuel Beckett」、『演劇研究センター紀要』、第8号、早稲田大学21世紀COE、2007年、pp.157-162

庄子萌「サミュエル・ベケットの self-translation をめぐって：『ゴドーを待ちながら』を中心に」、『Zephyr』、第21号、2009年、pp.77-99

対馬美千子「“Timeless Now” in Space: Beckett’s Plays via Arendt」、『論叢現代文化・公共政策』、第5号、筑波大学人文社会科学研究所現代文化・公共政策専攻、2007年、[s.p.]

西村和泉「Lumière sans source et ondoyante dans l’oeuvre de Samuel Beckett」、『演劇映像学2007』、第2集、早稲田大学グローバルCOE、2008年、pp.41-56

——「サミュエル・ベケット『事の次第』におけるコクーニングとポリフォニー」、『演劇映像学2008』、第2集、早稲田大学グローバルCOE、2009年、pp.45-64

藤原曜「サミュエル・ベケットの中期作品におけるカーニバル文学の影響とその限界」、『関西フランス語フランス文学』、第13号、仏文学会関西支部、2007年、[s.p.]

——、「Narrateurs et entendeurs dans les oeuvres romanesques et théâtrales de Samuel Beckett」、*Samuel Beckett Today/Aujourd’hui*, 19, Rodopi, 2008, pp.133-141.

宮脇永更「Fonction de l’Auditeur dans *Pas moi* de Samuel Beckett」、*Travaux en cours*, Université Paris 7-Denis Diderot U.F.R. L.A.C., 2009, pp.15-16.

根岸徹郎「ジャコモッティのアトリエに座るジュネ」、『専修大学人文科学研究所月報』、第231号、専修大学人文科学研究所、2007年、pp.29-38

——「古典・実行・舞台芸術——クローデルとジュネをめぐる二冊の本」、『舞台芸術』、第14号、2008年、pp.44-51

津田久美子「ふたりであることの希望：ジャン・ジュネ『女中たち』における生き延びる愛」、『人間文化創成科学論叢』、第11号、お茶の水女子大学大学院、2009年、pp.11-20

フランソワ・ビゼ「La communaute selon Jean Genet」、『青山フランス文学論集』、復刊第16号、青山学院大学、2007年、pp.25-40

——「LA PAGE TRANSPERCEE PIERRE GUYOTAT」、『青山スタンダード論集』、第2号、青山学院大学、2007年、pp.319-339

矢橋透「憑依と演劇——セルトー『ルーダンの憑依』の余白に」、『みすず』、2008年10月号、みすず書房、pp.20-27

尾崎文太「エメ・セゼール1946-1956 戯曲『そして犬たちは黙っていた』とフランス共産党離党の意味」、『言語社会』、第4号、一橋大学大学院言語社会研究科、2009年、pp.297-312

高岸敦夫「エメ・セゼールの『もうひとつのテンペスト』におけるキャリバンとカニバル」、『仏語仏文学』、第34号、関西大学、2008年、pp.265-275

——「エメ・セゼールとカニバリズム」、『千里山文学論集』、第80号、関西大学、2008年、pp.61-72

篠原学「演劇性の発見——ミラン・クンデラ『ジャックとその主人』と「小説」の概念」、『レゾナンス』、第6号、東京大学大学院総合文化研究科、2009年、pp.64-70

岡本澄子「書かれた声、書かれたイマージュ：1970年代後半におけるデュラスの作品空間」、『仏語仏文学研究』、第35号、東京大学仏語仏文学研究会、2007年、pp.279-304

武田はるか「デュラスと犯罪——戯曲『セヌ=エ=オワーズの陸橋』から」、『仏語仏文学研究』、第35号、東京大学仏語仏文学研究会、2007年、pp.253-277

西樹里「ベルナル=マリ・コルテス『ロベルト・ズッコ』をめぐって——「他/多なるもの」となるズッコ」、『演劇映像』、第44号、早稲田大学、2008年、pp.20-25

井上由里子「ヴァレール・ノヴァリナの演劇における救済——『激昂空間』の「ジャン」をめぐって」、『待兼山論叢』、第43号、大阪大学大学院文学研究科、2009年、pp.25-49

津田久美子「フランス現代演劇における「自己—他者」関係の分析（学生海外調査研究）」、『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書』、お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム、2008年、pp.43-47

オリヴィエ・ヌヴェー「叙事演劇をめぐりいくつかの問題（今日の「活動家演劇」における叙事演劇の回帰についての予備研究）」、間瀬幸江訳、『国際研究集会 越境する演劇』、早稲田大学演劇博物館、2008年、pp.189-198

ダンス研究・オペラ研究

芝池昌美「17世紀後半のフランスにおけるオペラ観：サン=テヴルモンを中心に」、『大阪音楽大学研究紀要』、第46号、大阪音楽大学、2007年、pp.9-23

梅野りんこ「17世紀フランスオペラとその社会：リュリの『テゼ』とシャルパンティエの『メデ』から見た近代ヨーロッパ」、『技術マネジメント研究』、第8号、横浜国立大学技術マネジメント研究学会、2009年、pp.21-35

赤塚健太郎「フランス風クーラントの特徴的な拍子構造について——18世紀前半の舞踏資料に基づく考察」、『音楽学』、第54巻第1号、2009年、pp.1-14

清水康子「フランス文学における舞踊(II)：古典主義の時代から啓蒙主義の世紀へ(1)」、『研究紀要』、第42号、国立音楽大学、2007年、pp.135-144

——「フランス文学における舞踊(III)：古典主義の時代から啓蒙主義の世紀へ(2)」、『研究紀要』、第43号、国立音楽大学、2008年、pp.137-148

内藤義博「フランス・オペラの誕生：その3」、『立命館言語文化研究』、第19巻第3号、立命館大学国際言語文化研究所、2008年、pp.221-234

——「フランス・オペラの誕生：その4」、『仏語仏文学』、第34号、関西大学、2008年、pp.151-169

——「フランス・オペラの誕生 その5：グルック『オーロドのイフィジェニー』」、『仏語仏文学』、第35号、関西大学、2009年、pp.113-134

森佳子「パリにおける初期オペレッタの変遷——オッフェンバックの《地獄のオルフェウス》」、『演劇研究センター紀要VIII』、早稲田大学21世紀COE、2007年、pp.31-41

渡辺響子「『ラザロ』、幻のオペラ」、『明治大学教養論集』、第446号、明治大学教養論集刊行会、2009年、pp.135-152

守山実花「ポワントテクニックの誕生とロマンティック・バレエに関する覚書：強靱なつま先が生み出す儚き幻想世界の出現」、『尚美学園大学総合政策研究紀要』、第16/17号、2009年、pp.77-93

稲田奈緒美「ロマンティック・バレエの優美に関する試論——身体技法から視覚の快楽へ」、『演劇研究センター紀要VIII』、早稲田大学21世紀COE、2007年、pp.185-195

秋葉尋子「モダンダンスにおけるフェミニズムとジャポニズムの影響について：1900年のパリ万国博を中心として」、『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系』、第60号、東京学芸大学、2008年、pp.191-199

——「ロイ・フラワーに関する一考察」、『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系』、第61号、東京学芸大学、2009年、pp.113-120

平野恵美子「バレエ・リュス初期作品《火の鳥》研究：民話から生まれた「火の鳥」の妖艶な女性像」、『演劇研究センター紀要』、早稲田大学21世紀COE、2007年、pp.217-224

北原まり子「バレエ《春の祭典》(1913年初演)の人身供犠の表象——作品の二部構成に注目して」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、第3分冊、早稲田大学大学院文学研究科、第55号、2009年、pp.61-72

安永愛「逆説としての〈肖像〉：ポール・ヴァレリー『ド

ガ・ダンス・デッサン』をめぐって」、『人文論集』、第58巻第1号、静岡大学、2007年、pp.99-124

日高弓雄「舞踏の「フロー」に関する研究(1) フランスで活動する舞踏家の現状と楽しさについて」『大阪教育大学紀要(第4部門 教育科学)』、第56巻第2号、大阪教育大学、pp.73-91

野田はるか「エチエンヌ・ドゥクローが見つめた人間——コーポラルマイムの世界」、『表現文化』、第3号、大阪市立大学文学部表現文化学教室、2008年、pp.85-95.

西村和泉「ヌーヴォー・シルクにおける身体表現の可能性——「白面の道化」の考察を中心に」、『名古屋芸術大学研究紀要』、第29号、名古屋芸術大学、2008年、pp.263-277

文化政策

鏡壯太郎「パリのオペラ座における装飾の設計変更及び競争入札に関する研究——パリのオペラ座における費用削減案に関する研究(その1)」、『日本建築学会計画系論文集』、第73巻(第625号)、社団法人日本建築学会、2008年、pp.695-700

——「パリのオペラ座における装飾の設計変更及び競争入札に関する研究——パリのオペラ座における費用削減案に関する研究(その2)」、『日本建築学会計画系論文集』、第73巻(第627号)、社団法人日本建築学会、2008年、pp.1113-1118

長嶋由紀子「フランス都市文化政策論——アヴィニョン・ミーティング(1964-70)の時代」、『演劇映像学2007』、第1集、早稲田大学グローバルCOE、2008年、pp.131-150

——「フランス都市文化政策論——制度史からみる政策理念の変遷(1971-1994)」、『演劇映像学2008』、第1集、早稲田大学グローバルCOE、2009年、pp.241-260

藤井慎太郎「芸術、文化、民主主義——文化的平等とフランスの舞台芸術政策」、『演劇研究センター紀要VIII』、早稲田大学21世紀COE、2007年、pp.271-286

——「文化政策と地方分権——フランスとリール市を例に」、『演劇映像学2007』、第1集、早稲田大学グローバルCOE、2008年、pp.111-129

藤井慎太郎・相馬千秋「フェスティバル試論——舞台芸術環境におけるその位置と機能」、『演劇映像学2008』、第1集、早稲田大学グローバルCOE、2009年、pp.441-460

八木雅子「欧州における演劇博物館：ベルギーにおける演劇博物館と情報ネットワーク」、『日欧・日亜比較演劇総合研究プロジェクト』成果報告集』、早稲田大学演劇博物館、2008年、pp.145-154

長谷部浩「英国、フランスの演劇養成機関付属図書館におけ

る映像資料についての実態調査』、『現代舞台芸術の映像資料デジタル・アーカイヴ構築に向けて』、東京大学、2008年、pp.35-42

パトリック・ドウ・ヴォス « Les archives audiovisuelle du spectacle vivant à l'âge du numérique: survol sur le cas de la France », 『現代舞台芸術の映像資料デジタル・アーカイヴ構築に向けて』、東京大学、2008年、pp.43-64

日仏交流史・日仏比較文化論

サカエ・ムラカミ・ジル「世阿弥とその狂言論——秘伝を通して考える——」、間瀬幸江訳、『国際研究集会 越境する演劇』、早稲田大学演劇博物館、2008年、pp.45-62

伊藤洋「フランス古典劇の日本における初期受容——ラシーヌ『イフェジェニー』を中心に——」、『国際研究集会 越境する演劇』、早稲田大学演劇博物館、2008年、pp.155-166

西尾和子「フェードルと玉手御前——「情熱」と「理性」の相克を生きる」、『帝京大学外国語外国文化』、第2号、帝京大学外国語学部外国語学科、2009年、pp.165-186

酒井美紀「尾崎紅葉『夏小袖』論：モリエール『守銭奴』の翻案としての」、『Comparatio』、第11号、九州大学、2007年、pp.1-19

山中知子「日本古典に見る性と愛(3)：『好色一代男』と『ドン・ジュアン』」、『追手門学院大学国際教養学部紀要』、第2号、追手門学院大学、2008年、pp.91-111

中村康裕「哲学的舞台芸術身体論1——デイドロ・世阿弥・ウイトゲンシュタインをめぐる——」、『沖縄県立芸術大学紀要』、第15号、沖縄県立芸術大学、2007年、pp.127-135

——「哲学的舞台芸術身体論2——デイドロ・世阿弥・ウイトゲンシュタインをめぐる——」、『沖縄県立芸術大学紀要』、第16号、沖縄県立芸術大学、2008年、pp.149-155

辻研子「堀辰雄とクローデル『マリヤへのお告げ』」、『国語国文薩摩路』、第52号、鹿児島大学法文学部国語国文学研究室、2009年、pp.37-49

清水義和「H.アンデルセンと寺山修司の『人魚姫』からJ.ジロドゥの『オンディーヌ』を経てB.バルトックと寺山修司の『青ひげ公の城』に現れる妖精」、『愛知学院大学教養部紀要』、第55巻第2号、愛知学院大学、2007年、pp.49-77

——「E・オニール作『喪服の似合うエレクトラ』とJ・ジロドゥ作『エレクトラ』と寺山修司作『身毒丸』の母子関係」、『愛知学院大学語研紀要』、第33巻第1号、愛知学院大学、2008年、pp.27-61

——「イヨネスコの『犀』とショーの『マイ・フェア・レディ』と寺山修司の『レミング』に於ける異邦人としての映像」、『愛知学院大学教養部紀要』、第56巻第2号、愛知学

院大学教養教育研究会、2008年、pp.49-71

堀真理子 « Ontological Fear and Anxiety in the Theatre of Beckett, Pinter, and Betsuyaku », *Beckett at 100: Revolving It All*, New York: Oxford UP, 2008, pp.246-258

—— « Japanese Reception of Samuel Beckett », *International Receptions of Samuel Beckett*, London; New York: Continuum, 2009, pp.147-162

修士論文

實川絢子「ニジンスキー振付『牧神の午後』と舞踊譜」(東京大学大学院総合文化研究科、2007年)

村上由美「マラルメと舞踊——バレエをめぐる考察」(早稲田大学大学院文学研究科、2007年)

岸本佳子「サミュエル・ベケットと視聴覚メディア——後期戯曲における身体の変容」(東京大学大学院総合文化研究科、2008年)

島山香奈「『アタリー』における血と時間」(東京大学大学院人文社会研究科、2008年)

本永百合子「ローラン・プティ振付作品『カルメン』研究」(早稲田大学大学院文学研究科、2008年)

飯田奈津子「ジャン・ジュネ『花のノートルダム』における悪の表れについて」(千葉大学大学院人文社会科学研究科、2009年)

久米宗隆「サミュエル・ベケットのラジオドラマ研究」(早稲田大学大学院文学研究科、2009年)

北原まり子「『春の祭典』に見られる「供儀」の表象」(早稲田大学大学院文学研究科、2009年)

竹垣江梨子 « Etude sur *La Vie de Marianne* de Marivaux — le langage et le caractère » (京都大学大学院文学研究科、2009年)

田ノ口誠悟「ジャン・ジロドゥ作『シャイヨの狂女』における〈ひもたち〉の正体を巡って」(早稲田大学大学院文学研究科、2009年)

中山大輔「コンテンポラリーダンスは文化政策とどのような関係を築くことができるか——1980-2000年代のフランスにおけるダンス政策の展開」(東京大学大学院総合文化研究科、2009年)

堀切克洋「残酷とユーモア——アントナン・アルトー『演劇とその分身』を読み直す」(東京大学大学院総合文化研究科、2009年)

宮脇永史 « Le monologue à trois ou le théâtre des spectateurs - autour de *Pas moi et de Cette fois* de Samuel Beckett » (パリ第4大学フランス文学研究科、2009年)

吉田未央「フランスにおけるバレエリュス受容：「フランス

趣味」をめぐる」(東京大学大学院総合文化研究科、2009年)

博士論文

千川哲生 *L'art de raisonner, l'art de débattre : La dimension argumentative dans les tragédies et la théorie de Pierre Corneille* (パリ第4大学、2007年11月20日)

坂巻康司 *L'influence des idées de Mallarmé sur les théories de la représentation à la fin du XIXe siècle et au début du XXe siècle* (パリ第8大学、2007年12月21日)

間瀬幸江 *Formes narratives dans la dramaturgie de Jean Giraudoux* (リヨン第2大学、2008年1月12日)

家山也寿生 「ジャン・コクトーにおける神話の変容」(早稲田大学大学院文学研究科、2008年2月5日)

小田中章浩 「現代演劇の地層—フランス不条理劇生成の基盤を探る—」(早稲田大学大学院文学研究科、2008年2月5日)

中畑寛之 「世紀末の白い爆弾—ステファヌ・マラルメの書物、演劇、そして行動」(神戸大学大学院人文学研究科、2008年3月5日)

横山義志 *La grâce et l'art du comédien. Conditions théoriques de l'exclusion de la danse et du chant dans le théâtre des Modernes* (パリ第10大学、2008年3月12日)

白田由樹 「サラ・ベルナルの伝説空間とフェミニテの神話」(大阪市立大学大学院文学研究科、2008年3月24日)

尾崎文太 「エメ・セゼールの戯曲と政治思想—1940年代から1960年代まで」(一橋大学言語社会研究科、2008年11月12日)

黒岩卓 *Composer, jouer et diffuser les « paroles polies » — contribution à l'étude de la vertification des sotties —* (早稲田大学大学院文学研究科、2009年11月18日)

3. その他(解説・評論・エッセイなど)

東宏治 「西田稔先生を送る—バレエ・ラシーヌ・言語学」、『言語文化』、第10巻第4号、同志社大学、2008年、pp.751-757

穴澤万里子 「血の考察—『わたしは血』を観て」、『シアターアーツ』、第31号、2007年、pp.6-8

—「パリの演劇通信—パリっ子を満足させる二つの劇場」、『悲劇喜劇』、2008年12月号、pp.64-67

尼ヶ崎彬 「漂白された人生のかけら—ピーピング・トム『Le Sous Sol / 土の下』」、『ダンスマガジン』、2009年5月号、p.86

阿部仲麻呂 「ジャン・アヌイの演劇『ひばり』から見えてく

るもの—ジャンヌ・ダルク裁判の謎」、『清泉文苑』、第25号、清泉女子大学人文科学研究科、2008年、pp.26-31

I K U O三橋 「追悼マルセル・マルソー 真紅の薔薇に埋もれたマルソー」、『悲劇喜劇』、2008年1月号、pp.42-43

石井達朗 「野放図なまでに輝く人生—ヤン・ロワース&ニードカンパニー『イザベラの部屋』」、『ダンスマガジン』、2007年7月号、p.86

—「男らしさというゲーム—カンパニー・サミュエル・マチュー『Us-Band』」、『ダンスマガジン』、2008年1月号、p.82

—「狂おしいばかりの愛の結晶—ジャレ+シェルカウイ+ジルバール『スリー・スペルズ』」、『ダンスマガジン』、2008年6月号、p.86

—「サーカスの新風—シルク・バロック『三文サーカス』」、『ダンスマガジン』、2009年12月号、p.87

石川理絵子・佐伯隆幸 「書評 『縞子の靴』(上)(下)」、『日仏演劇協会会報』、復刊第1号、2008年、p.7

石澤秀二 「バローさんの思い出『クリストファ・コロンプスの書』」、『テアトロ』、2008年1月号、p.59

市村弘正 「ベケットの小さなポリティクス」、『舞台芸術』、第11号、2007年、pp.90-93

伊藤洋 「現代に生きるフランス古典劇」、『テアトロ』、2007年8月号、pp.35-37

—「現代フランス演劇の潮流」、『テアトロ』、2008年5月号、pp.28-30

—「『五月革命』の頃のフランス演劇」、『日仏演劇協会会報』、復刊第1号、2008年、p.5

—「多彩なモリエール演出」、『テアトロ』、2009年12月号、p.28-30

—「書評 『演劇学の教科書』(国書刊行会)—多彩な演劇を論理的に解明する」、『シアターアーツ』、第41号、2009年、pp.126-127

鶴岡哲 「言葉を沈黙へと翻訳する」、『舞台芸術』、第11号、2007年、pp.14-22

—「舞踏家の身体が読むジュネの言葉」、『舞台芸術』、第14号、2008年、pp.86-96

薄井憲二 「バレエ・リュスと日本 永遠のあこがれ」、『ダンスマガジン』、2009年10月号、pp.46-47

内野儀 « Perturbation, échecs : deux moments 'nationalistes' dans la culture de la danse au Japon », *Danses et identités de Bombay à Tokyo*, trad. Catherine Delaruelle, Centre national de la danse, 2009, pp.79-91

宇野邦一 「ジュネの悲しみ」、『舞台芸術』、第11号、2007年、pp.23-30

- 「身体と声—ベケット散文作品の舞台化をめぐる」、『舞台芸術』、第11号、2007年、pp.94-99
- 大岡淳「Shizuoka 春の芸術祭 2007 報告（上）」、『テアトロ』、2007年8月号、pp.76-69
- 「Shizuoka 春の芸術祭 2007 報告（下）」、『テアトロ』、2007年9月号、pp.74-77
- 「Shizuoka 春の芸術祭 2008 報告（下）」、『テアトロ』、2008年9月号、pp.64-68
- 太田省吾「微かな光のほうへ」、『舞台芸術』、第11号、2007年、pp.75-80
- 鴻英良、パトリック・ドゥ・ヴォス「インタビュー・ドルシー・ルガンバ 演劇は言葉を獲得するための方法だった——ルワンダの虐殺を生き延びて」、『アートポリティクス』、論創社、2009年、pp.38-51
- 大間知靖子「追悼ニコラ・バタイユ パリのニコラおじさん」、『悲劇喜劇』、2009年1月号、pp.58-59
- 岡田正子「フランス演劇の現代作家ジャン・ポール アレーグル——時空を超えた想像力」、『テアトロ』、2008年5月号、pp.16-19
- 「追悼ニコラ・バタイユ ニコラの残したもの」、『悲劇喜劇』、2009年1月号、pp.56-57
- 岡室美奈子「祭りのあと—ベケット誕生百年を終えて」、『演劇映像』、第48号、早稲田大学、2007年、pp.115-117
- 岡見さえ「寓意に満ちた夜——ジョセフ・ナジ『遊*ASOBU』」、『ダンスマガジン』、2007年4月号、pp.54-56
- 「虚構と死が映す身体の曖昧さ——ヤン・ファール『死の天使』」、『ダンスマガジン』、2008年5月号、p.85
- 「ヤン・ファール『寛容のオルギア』」、『ダンスマガジン』、2009年10月号、pp.84-85
- 小田中章浩「2007～2008年の芝居——ジャン＝ピエール・ヴァンサン『女房学校』(オデオン座)」、『日仏演劇協会会報』、復刊第1号、2008年、p.6
- 「フランス演劇——2006年 コメディーフランセーズにおける政治と演劇の問題、アヴィニオン演劇祭のその後、ベケット生誕百周年」、『国際演劇年鑑 2007』、国際演劇協会編、2007年、pp.112-116
- 「フランス演劇 2007 60周年を迎えたアヴィニオン演劇祭、太陽劇団の新作など」、『国際演劇年鑑 2008』、国際演劇協会編、2008年、pp.97-102
- 「フランス演劇 2008 一つの時代の終わり? サルゴジ政権の文化政策、演劇界の世代交代など」、『国際演劇年鑑 2009』、国際演劇協会編、2009年、pp.119-124
- 風間研「ムヌシュキンと『太陽劇団』」、『テアトロ』、2008年1月号、p.63
- 鹿島茂「劇場通いの本当の理由」、『悲劇喜劇』、2009年4月号、pp.6-7
- 金井ゆき「今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から ニジンスキーのダンス・デュサン バレエ・リュスの舞台イラスト集」、『国立国会図書館月報』、第579号、国立国会図書館、2009年、pp.2-3
- 金原礼子「楽劇の窓 クローデル『縊子の靴』を演じて」、『紫明』、第24号、紫明の会、2009年、pp.96-100
- 北川登園「多彩なマテイ・ヴィスニユックの世界——ビエンナーレ KAZE 国際演劇祭 2009」、『テアトロ』、2009年11月号、pp.40-42
- 國吉和子「パリの『病める舞姫』——ボリス・シャルマツの新作について」、『シアターアーツ』、第38号、2009年、pp.31-37
- 熊谷謙介「死者を生き返らせ、再び死なせる——アラン・メリアンティ演出『シャティエラの四時間』について」、『舞台芸術』、第11号、2007年、pp.62-65
- 黒岩卓「聖王の奇跡とその観衆——ルイ九世の生涯を主題とする二つの聖史劇」、『アジア遊学』、第115号、2008年10月号、勉誠出版、pp.84-87
- 桑原智成「苦悩の祝祭空間—アラン・プラテル・バレエ団『聖母マリアの祈り vsprs』」、『ダンスマガジン』、2007年8月号、pp.50-52
- 坂手洋二「ニューヨークからベルリン、パリへ」、『悲劇喜劇』、2007年6月号、pp.76-79
- 「グルノーブルの『交錯する視線』」、『悲劇喜劇』、2008年8月号、pp.57-60
- 佐々木涼子「ダンスの一人称小説—フィリップ・ドゥクフレ『SOLO』」、『ダンスマガジン』、2007年3月号、pp.50-51
- 佐藤康「連続セミナー「演劇言語の探求」報告（前）」、『日仏演劇協会会報』、復刊第1号、2008年、p.12
- 「Rezeption des französischen theaters in Japan」（「日本におけるフランス演劇の受容」）、*Theater in Japan*, Eiichiro HIRATA und Hans-Thies LEHMANN (Hg.), Berlin: Theater der Zeit, 2009, pp.198-204
- 佐伯隆幸「オリヴィエ・ピィについてわたしの考える若干の事象」、『シアターアーツ』、第36号、2008年、pp.40-45
- 坂口勝彦「アルトの分身」、『Corpus』、第1号、コルプス、2007年、pp.46-55
- 鈴木康司「Honnête Homme から Philosophe へ——Versailles から Paris へ」、『日仏文化』、第74号、日仏会館、2007年、pp.3-11
- 鈴木晶「バレエ・リュスの輝き、いまも」、『ダンスマガジン』、2009年10月号、pp.36-41

- 鈴木佑也「バレエ・リュスとピカソ——変革期における両者の
の交わり」、『ユリイカ』、2008年11月号、青土社、pp.121-
128
- 関根敏子「バッハの組曲に大きな影響を与えたフランスのバ
ロック舞踏とは?」、『レッスンの友』、2007年8月号、レッ
スンの友社、pp.13-21
- 扇田昭彦「目を疑う垂直のスペクタクル——シルク・デュ・
ソレイユ『KA』」、『ダンスマガジン』、2007年6月号、p.73
——「支配を受ける民族の叫び——イヨネスコ劇場『授
業』」、『ダンスマガジン』、2007年11月号、p.91
——「ラヴォーダン演出『山の巨人たち』」、『ダンスマガジ
ン』、2009年1月号、p.82
——「新国立劇場『舞台は夢——イリュージョン・コミッ
ク』」、2009年2月号、p.92
——「鹿賀丈史が見せた異色のヒーロー——ミュージカル『シ
ラノ』」、『ダンスマガジン』、2009年7月号、p.54
- 高橋信良「想像力を挑発する——『わたしは血』における残
酷なイメージ」、『シアターアーツ』、第31号、2007年、
pp.9-11
——「書評『演劇の歴史』」、『日仏演劇協会会報』、復刊第
1号、2008年、pp.7-8
- 高橋宏幸「インタビュー——ヨシ笈田」、『シアターアーツ』、
第35号、2008年、pp.29-35
- 立木燦子「都市のなかに生成するダンス—リヨン・ダンス・
ピエンナーレ」、『ダンスマガジン』、2007年1月号
——「やわらかな異議申し立て」、『ダンスマガジン』、2007
年5月号、p.54
——「ドミニク・バグエの星のもとに——モンペリエ・ダン
ス・フェスティバル2007」、『ダンスマガジン』、2007年10
月号、pp.76-77
——「多文化主義を映すベルギーの新しい波——ペイ・ド・
ダンス／シェルカウイ『Myth』『オリジン』」、『ダンスマガ
ジン』、2008年6月号、pp.80-81
——「世代を超えた融合と共振——リヨン・ダンス・ピエン
ナーレ2008」、『ダンスマガジン』、2009年1月号、pp.72-73
- 谷正雄「コメディフランセーズと私」、『シアトロ』、2007年
11月号、pp.74-75
- 田ノ口誠悟「ジャン・ジロドゥの戯曲が孕む政治性につい
て」、『劇 Drama』、第44号、劇場文化・ドラマの会、2009
年、pp.8-12
- 田之倉稔「演劇的にパリをのぞく」、『シアトロ』、2008年5
月号、pp.20-23
——「書評『メタ演劇の歴史とドラマトゥルギー』 矢橋透「著」
『演劇の精神史』評」、『水声通信』、第26号、水声社、2008
年、pp.54-57
- パトリック・ドゥ・ヴォス「特別インタビュー——ロバート・
ウィルソン、能を語る」、竹内孝宏訳、『Zeami』、第4号、
森話社、2007年、pp.189-207
——「フランスの演劇人たちは歌舞伎に何を見出してきた
か」、『遠近』、第29号、国際交流基金、2009年、pp.56-59
- 豊島重之「四角いベケット—モレキュラーシアターのベケッ
ト劇」、『舞台芸術』、第11号、2007年、pp.100-109
- 貫成人「ローザスがふたたび変貌した—ローザス『デッシ
ュ』」、『ダンスマガジン』、2007年7月号、pp.34-35
- 根岸徹郎「白人として、そして黒人として——『黒んぼたち』
のための未発表の序文』 解題」、『舞台芸術』、第13号、2008
年、pp.131-135
——「2006～2007年の芝居——シェローの「大審問官」
(『カラマゾフの兄弟』より)とコメディ=フランセーズの
『シラノ・ド・ベルジュラック』」、『日仏演劇協会会報』、復
刊第1号、2008年、pp.6-7
- 野田学「声をめぐる歌舞伎型冥想詩——ルパージュの『リッ
プシンク』」、『シアターアーツ』、第37号、2008年、pp.38-
45
- 芳賀直子「ニジンスキーの魅力伝える版画集」、『版画芸
術』、第36巻第3号、阿部出版、2007年、pp.84-89
- 花柳伊寿穂「和田誠一翻訳戯曲集刊行によせて——兄・和田
誠一を語る」、『シアトロ』、2008年5月号、pp.24-27
- ロジャー・パルバース「この台詞がおもしろい!——サミュエ
ル・ベケット『ゴドーを待ちながら』」、『悲劇喜劇』、2007
年8月号、pp.26-27
- 林浩平「劇的想像力の祝祭——ヤン・フェーブル『わたしは
血～中世妖精物語』」、『ダンスマガジン』、2007年6月号、
pp.56-57
- 林正和「アヴィニオンフェスティバル2007」、『シアトロ』、
2007年10月号、pp.76-79
——「マリヴォーに酔いしれたこの秋パリ」、『シアトロ』、
2008年3月号、pp.70-71
——「フランス現代演劇変貌の様相」、『シアトロ』、2008年
5月号、pp.14-15
——「フランスレポート 政治性が目立った、パリ秋のフェ
スティバルから」、『シアトロ』、2009年2月号、pp.84-86
——「アヴィニオンフェスティバル09」、『シアトロ』、2009
年10月号、pp.36-39
- 平田オリザ「フランスと私」、『ふらんす』、2007年6月号、
白水社、pp.4-5
- 藤井慎太郎「フランスの地方文化政策」、『地域創造』、第22
号、2007年、pp.66-71

- 「カナダ・ケベック州の文化政策」、『地域創造』、第24号、2008年、pp.56-61
- 「フィリップ・ミンヤナ『死者たちの家』 人形が奏でる死と笑いの音楽」、『WALK』、第53号、水戸芸術館、2007年、pp.109-123
- 「ヴァレール・ノヴァリナ『話される言葉を前に』 あるいは「息」の詩学」、『WALK』、第54号、水戸芸術館、2007年、pp.105-120
- 「ワジディ・ムワド『森』 物語が不可能な時代にあえて物語を語ること」、『WALK』、第55号、水戸芸術館、2007年、pp.76-91
- 「ジョエル・ポムラ『商人』現代における労働と貧困の寓話」、『WALK』、第57号、水戸芸術館、2008年、pp.107-119
- 「今日のフランス演劇をめぐる覚書」、『劇場文化』、第12号、静岡舞台芸術センター、2008年、pp.100-106
- 「ケベックの舞台芸術」、『はじめて出会うカナダ』、日本カナダ学会編、有斐閣、2009年、pp.67-68
- 保坂和志「ベケットの真似は簡単にできてしまう」、『舞台芸術』、第11号、2007年、pp.68-74
- 堀切克洋「現代のギリシャ悲劇?——ワジディ・ムアウッド『焼け焦げるたましい』」、『シアターアーツ』、第41号、2009年冬号、pp.65-74
- 堀真理子「『待つこと』がむずかしくなった時代に—肉体の回復をめざす演劇人たち」、『水声通信』、第22号、2008年、pp.118-125
- 牧瀬浩一「パンタン 多文化が混在するパリ郊外の国立ダンスセンター」、『遠近』、第20号、国際交流基金、2007年、pp.34-37
- 松岡心平「後戸的思考の系譜——渡邊守章『薔薇の名』」、『舞台芸術』、第15号、2009年、pp.152-157
- ジェラルド・マノニ「コンテンポラリーダンスのおとぎ話—アンジェラン・プレルジョカージュ振付『白雪姫』」、林修訳、『ダンスマガジン』、2009年2月号、pp.86-87
- 翠川博之「『出口なし』と『出口なし』」、『フランス文学研究』、第27号、東北大学フランス語フランス文学会、2007年、pp.73-77
- 「書評・山縣熙、『劇作家サルトル』(作品社、2009年)」、『図書新聞』、2913号、2009年4月11日、4面
- 森尚也「書評『ベケット巡礼』」、『英語青年』、第153巻第4号、研究社、2007年
- 「書評 田尻芳樹著『サミュエル・ベケットとプロセティックな身体：モダニズムにおける器官と感覚』」、『言語・情報・テキスト』、東京大学出版局、2008年、pp.85-90
- 諸井誠「エンドレス・レクイエム(9) モーリス・ベジャールは二度死んだ」、『春秋』、2008年4月号、pp.16-18
- 八木雅子「書評 『宮廷バレエとバロック劇 フランス一七世紀』」、『日仏演劇協会会報』、復刊第1号、2008年、p.8
- 八角聡仁「手袋のポエティクス／ポリティクス」、『舞台芸術』、第11号、2007年、pp.4-13
- 山田せつ子「ジャン・ジュネへの応答——ダンスのポリフォニックな作業の報告」、『舞台芸術』、第11号、2007年、pp.31-45
- 「漂流する身体——ダンス公演『恋する虜——ジュネ／身体／イマージュ』を終えて」、『舞台芸術』、第14号、2008年、pp.52-77
- 山本健一「混沌のアビニヨン演劇祭」、『テアトロ』、2008年10月号、pp.64-66
- 「サルトルの女たち」、『悲劇喜劇』、2008年10月号、pp.47-50
- 結城雅秀「虚飾を取り去った人間の究極——パリ・アテネ座「勝負の終わり」「クラブの最終テープ」」、『悲劇喜劇』、2007年4月号、pp.72-74
- 横山義志「劇団『ク・ナウカ』とフランス」、『ふらんす』、2007年6月号、白水社、pp.46-47
- 芳野まい「江戸糸あやつり人形『結城座』によるジュネの『屏風』」、『ふらんす』、2007年6月号、白水社、pp.42-45
- 「インタビュー オリヴィエ・ピィ」、『シアターアーツ』、第36号、2008年、pp.46-51
- 吉増剛造「薄闇の中で耳を澄ます—キーツからベケットへ」、『舞台芸術』、第11号、2007年、pp.81-89
- 鷺見洋一「啓蒙時代初期のバリ——文学、絵画、音楽、演劇、都市計画など」、『日仏文化』、第74号、日仏会館、2007年、pp.12-25
- 渡辺敦彦「サシャ・ヴァルツあるいは記憶の廃墟—エクサンプロヴァンス音楽祭／アヴィニヨン演劇祭」、『ダンスマガジン』、2007年11月号、pp.78-79
- 「異文化のポリフォニー—首藤康之&シェルカウイ『アボクリフ』」、『ダンスマガジン』、2007年12月号、pp.52-53
- 「ひとつの終焉を越えて—ピナ・バウシュ、モンタルヴォ&エルヴェ新作」、『ダンスマガジン』、2009年6月号、pp.72-73
- 渡辺淳「ベケットの遺産」、『図書』、第699号、岩波書店、2007年、pp.12-15
- 「新釈 サラ・ベルナル物語(1)」、『悲劇喜劇』、2007年9月号、pp.57-61
- 「新釈 サラ・ベルナル物語(2)」、『悲劇喜劇』、2007年10月号、pp.61-64

- 「新釈 サラ・ベルナル物語 (3)」、『悲劇喜劇』、2007年11月号、pp.46-49
- 「新釈 サラ・ベルナル物語 (4)」、『悲劇喜劇』、2007年12月号、pp.56-59
- 「新釈 サラ・ベルナル物語 (5)」、『悲劇喜劇』、2008年1月号、pp.44-47
- 「新釈 サラ・ベルナル物語 (6)」、『悲劇喜劇』、2008年2月号、pp.62-67
- 「新釈 サラ・ベルナル物語 (7)」、『悲劇喜劇』、2008年3月号、pp.47-51
- 「新釈 サラ・ベルナル物語 (8)」、『悲劇喜劇』、2008年4月号、pp.58-62
- 「新釈 サラ・ベルナル物語 (9)」、『悲劇喜劇』、2008年5月号、pp.58-62
- 「新釈 サラ・ベルナル物語 (10)」、『悲劇喜劇』、2008年6月号、pp.63-66
- 「追悼ロジェ・プランション ロジェ・プランションの遺産」、『悲劇喜劇』、2009年8月号、pp.64-66
- 渡辺保「オペラ座の海老蔵——パリ・オペラ座歌舞伎公演」、『ダンスマガジン』、2007年6月号、p.59
- 「ベジャール自身の物語」、『ダンスマガジン』、2008年5月号、p.79
- 渡邊守章「語ること、劇——「語り」「演技」「身体」」、『SPT』、第4号、世田谷パブリックシアター、2007年、pp.16-25
- 「観世榮夫氏を悼む——越境する伝統 (1)」、『舞台芸術』、第12号、2007年、pp.233-247
- 「越境する伝統 (2) 古典と伝統と」、『舞台芸術』、第13号、2008年、pp.190-199
- 「越境する伝統 (3) 日本で書かれた傑作——ポール・クローデル『縞子の靴』」、『舞台芸術』、第14号、2008年、pp.146-168
- 「《外部》と《越境》——あるいは「離見の見」ということ」、『日仏演劇協会会報』、復刊第1号、2008年、pp.3-4
- 「越境する伝統 (4) 再び《伝統》と《古典》について——言語と身体」、『舞台芸術』、第15号、2009年、pp.206-219
- 「眼力、あるいは「聴き取る目」」、『図書』、第721号、2009年、pp.20-23
- 「ラシーヌの台詞を言うこと」、『Mimi』、第28号、関西日仏学院、2009年、p.1
- 「能とその「外部」——現代の能の一樣相」、『日本の伝統芸能講座 舞踊・演劇』、服部幸雄監修、淡交社、2009年、pp.389-411
- 渡邊守章、松浦寿輝、浅田彰「鼎談 バルト、ラシーヌ、クローデル」、『文學界』、2007年1月号、文藝春秋、pp.172-199
- 太田省吾、佐藤信、石光泰夫、ジャン=クリスチアン・ブーヴィエ、渡邊守章「シンポジウム 作業と言説——現代演劇の地平」、『舞台芸術』、第15号、2009年、pp.158-205 [1997年5月のシンポジウム記録を再録]
- アクラム・カーン「生と死、両者をつなぐもの」、『ダンスマガジン』、2007年2月号、pp.72-73
- シディ・ラルビ・シェルカウイ「首藤康之との創作がスタートしました」、『ダンスマガジン』、2007年5月号、pp.55
- アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル「新しい世界へ」、『ダンスマガジン』、2007年5月号、pp.68-69
- 「ダンサーの経験が観客に手渡される」、『ダンスマガジン』、2007年7月号、pp.36-37
- ジョルジュ・バニユ「二重に台座に据えられた小さな胸像のように」、熊谷謙介訳、『舞台芸術』、第11号、2007年、pp.58-61
- オリヴィエ・ピィ「『イリュージョン・コミック——舞台は夢』 『若き俳優への手紙』」、横山義志訳、『劇場文化』、静岡舞台芸術センター、2008年、pp.33-37
- リュック・ファン・デン・ドリリス「ヤン・ファールと対話」、高橋信良訳、『シアターアーツ』、第39号、2009年、pp.4-14
- アラン・プラテル「共感力を呼びさますーアラン・プラテル・バレエ『憐れみ pitié !』」、『ダンスマガジン』、2009年5月号、p.66
- アラン・ミリアンティ「恥辱の息子」、熊谷謙介訳、『舞台芸術』、第11号、2007年、pp.46-57
- アンヌ・ユベルスフェルト「コルテス——その才能の緒地平」、佐藤康訳、『日仏演劇協会会報』、復刊第1号、2008年、pp.9-11

活動報告

2008 年度

●総会

2008 年 12 月 13 日 (土) 会場：日仏会館 501 号会議室

●日仏演劇協会セミナー (東京日仏学院共催) (会場：東京日仏学院 エスパシマージュ)

① 7 月 8 日 (火) 19 時～ 21 時 「同時代演劇への招待：エリ・プレスマン『ドン!』」

講師：佐藤 康

リーディング＝演出：平田朝音 (俳優座) 出演：大嶋守立、林勇輔 (Studio Life)

② 12 月 12 日 (金) 19 時～ 21 時 「ヨーロッパ・クラウンの今」

講師：山上 優 聞き手：佐藤 康

●シンポジウム・講演会

(1) 2008 年 6 月 17 日 (火) 18 時～ 19 時 30 分

「学習院大学でピエについて話す会」(於：学習院大学西 5 号館 301)

スピーカー：佐伯隆幸、渡邊敦彦、宮城聡

静岡県舞台芸術センター (SPAC) 主催、日仏演劇協会・学習院大学大学院人文科学研究科 身体表象文化学専攻 共催

(2) 2008 年 9 月 27 日 (土) 16 時～ 16 時半 日仏会館ホール 講演『『古典』と『伝統』— 日仏間の舞台芸術の受容について』講師：渡邊守章

日仏諸学会総合シンポジウム「日仏学術交流のルネッサンス」(9 月 26 日～ 28 日)

(3) 2008 年 12 月 12 日 (金) 19 時～ 日仏会館 501 号会議室 講演「ロスタン『シラノ』新訳を終えて— 日本に於けるフランス演劇の受容の一局面」講師：渡邊守章

●フランス語圏演劇に関する公演・研究活動への協力・後援

(1) 京都芸術劇場／空中庭園 朗読オラトリオ『縞子の靴あるいは最悪かならずしも定かならず— 四日間のスペインの芝居— (抄)』(ポール・クローデル作)

7 月 6 日 (日)～ 8 日 (火) 京都芸術劇場・春秋座 (京都造形大学内) の後援

(2) SPAC 静岡芸術劇場／パリ・オデオン座 オリビエ・ピエ来日公演 6 月 28～ 29 日『イリュージョン・コミック』『若き俳優への手紙』への協力

2009 年度

●総会

2009 年 6 月 6 日 (土) 17 時～ 会場：専修大学 (神田)

●テーブル・ロンド

2009 年 6 月 6 日 (土) 18 時～ 会場：専修大学 (神田)

「劇的想像力の再生は可能か：《イリュージョン・コミック》をめぐって」

パネラー：鶴山仁 (新国立劇場演劇芸術監督・演出家)

横山義志 (静岡県舞台芸術センター文芸部)

モデラトリス：八木雅子 (日仏演劇協会)

編集後記

本来なら春出すべきだったが、遅れた。「コレクション現代フランス語圏演劇」の刊行その他、万やむをえない事情が重なったゆえだ。大事な出版の推進以外の繁忙事情の一つをいかつまむ暇はないのだが、事務局長のわたしだけでなく、実行委員が個々雑務に追われているのが現状、要は、大学その他の教育・研究場がなかなか思考する時間を呉れないのだ。「学」は危機である。他方、むやみとこの地にくるフランスの演劇人への応接も一層われわれの時間を削らせる。勉強のいい機会に違いないとはいえ、少しゆったり構えよう。研究はときに興行するのは演劇だから必定、二役も三役もやることは是非ないとはいえ、われわれにとっての環は思考の痕跡化であるのも忘れまい。本号の遅れの弁解とともに、現在の日仏の演劇創造総体にとって本質的な問題を孕むことへの発語。展望は不明ながら踏ん張るほかない。幸いというか、小生は今年度で学校から解放されるから、時間を割けるだろうと自分に期待中。それにしても、今夏は耐え難い暑さで、越せるのかと不安だった。会長も療養中とあり心配だし、諸氏もお元気を願う。ま、厭な時代でも、活きた演劇への眼を怠りなく、かつ、次の知の世代を発見、獲得、登場を促すことも抜からぬようにしたい。同次第で、地獄の酷暑で稿を書いていただいた方々、とくに佐藤実枝先生と秋山伸子氏、友谷知己氏に感謝。また、書誌作成でお手をわずらわせたもともと若い会員、堀切克洋さん、北原まり子さん、ご苦労さま。ありがとう。

なお、この稿のゲラの段階で訃報が届いた。アンヌ・ユベルスフェルトさんが亡くなられた。洋の東西を問わず、個人的にも公的にも必要なひとたちが逝ってしまう。合掌。

(佐伯隆幸)

フランス語圏演劇に関する催しの情報をお寄せください

当会 HP (<http://www.sfjth.jp.org>) では、日本でのフランス語圏の舞台芸術に関する各種催しに関する情報を掲載しています。フランス語圏からの来日公演、フランス語で書かれた作品の翻訳・翻案による公演のほか、フランス語圏演劇に関する講演や研究会など、日仏演劇協会以外の団体・個人が主催する催しが対象です。メーリングリストによる配信も行っています。ML 配信・HP 掲載を希望される方は、(1) 件名を「関連イベント掲載依頼」として、(2) メール配信用に、そのまま配信できる文面（テキスト形式）を事務局（office@sfjt.sakura.ne.jp）までお送りください。その際、必ず問合せ先を明記してください。いただいた情報は、基本的に HP の「関連情報」ページに掲載をいたします。講演名／公演名等、日時、会場、URL 等の情報のほか、添付ファイル等へのリンクも可能です。

日仏演劇協会 事務局

171-8588 東京都豊島区目白 1-5-1 学習院大学大学院 人文科学研究科
身体表象文化学専攻 気付 03-3986-0221 (代)
office@sfjt.sakura.ne.jp <http://www.sfjth.jp.org/>

日仏演劇協会会報 復刊2号

発行日 2010年11月20日

発行 日仏演劇協会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内 tel: 03-5424-1141

編集代表 佐伯隆幸

印刷 (有) 七月堂

156-0043 世田谷区松原 2-26-6-103 tel: 03-3325-5717 fax: 03-3325-5731

